





エンゲルス・堺利彦 譯

社會主義  
の  
發展



1931 白揚社 版



(函) 社 會

(號) 1717

永 久 保 存

6,6,5



調査済

圖書印

事務

官印



88

内務省
66-4
正本

昭和五年一月十日  
 左内務省  
 事務子  
 認

事務  






Vertical text on the left side, possibly a title or page number, written in a faded orange/red ink.

Vertical text on the left side, possibly a title or page number, written in a faded orange/red ink.

Vertical text on the left side, possibly a title or page number, written in a faded orange/red ink.

Vertical text on the left side, possibly a title or page number, written in a faded orange/red ink.



Vertical text on the left side, possibly a title or page number, written in a faded orange/red ink.

Vertical text on the left side, possibly a title or page number, written in a faded orange/red ink.

Vertical text on the left side, possibly a title or page number, written in a faded orange/red ink.

Vertical text on the left side, possibly a title or page number, written in a faded orange/red ink.





Engels, Friedrich

展發の義主會社

—へ學科らか想空—

(釋註・補增・譯新)

著 スルゲンエ  
譯 彦 利 塚

---

版年一三九一



HX276

E55616

1931

copy 1

Asian

Japan

Cage

LC

LC

99-430133



## 譯者の序

私が初めて社會主義の思想に接觸したのは明治三十四年（一九〇一年）の頃であつた。それから三年の後、明治三十七年、私は初めてマルクス・エンゲルスの『共産黨宣言』を讀んだ。そしてそれを、幸徳秋水と共に反譯して、週刊『平民新聞』に載せた。それから又二年の後、明治三十九年（一九〇六年）七月、私は初めてこの『社會主義の發展』を反譯して、雑誌『社會主義研究』に載せた。その時の表題は『科學的社會主義』であつた。私はこの二大名著を初めて日本に紹介し得た事を以て聊か自ら誇りとしていた。然しその譯文が甚だマズくもあり、又少なからぬ誤謬をも含んで居たことは、勿論である。

その後、私は幾度もこの二書の改譯に勉めた。そして『宣言』の方は寫本として處々に存在し、或は誰人かの無届出版の禁止本として多少殘存して居るだけで、今だに公刊の自由を得ないが、『發展』の方は幾度も幾度も刊行の機會を得た。即ちその初は大正七年（一九一八年）三月および四月の雑誌『新社會』に於いてであり、次は大正十年、大鏡閣からの單行本、更にその次は大正十三年、白揚社からの單行本であつた。そしてそれらの單行本の表題は、『空想的及科學的社會主義』



『空想から科學へ』『空想的社會主義と科學的社會主義』など色々であり、そして又附録として、原書の英譯の序論が、『唯物論と宗教思想』といふ表題で加へられて居たりした。

然しそれまでの私の譯文は、總て英譯からの重譯であつたので、昭和二年一月、更に原文からの直接譯を、同じく白揚社から發行した。その表題は『社會主義の發展』であつた。その時、序論だけは別冊のパンフレットとして發行したが、後の版には又それを本書の附録にした。

然るに昭和三年八月、改造社のマルクス・エンゲルス全集第十二卷の中で、この書が私の受持とされた時、私は更に前譯に少なからぬ訂正を加へ、今度は『空想的社會主義と科學學的社會主義』といふ表題を附した。

次に昭和四年二月、『改造文庫』が初めて發行された時、その第一部第十篇として、私のこの譯書が『社會主義の發展』といふ表題で収録され、白揚社とも諒解の上、今現に世上に行はれてゐる。

然るに今回又、白揚社から（改造社とも諒解の上）この『新譯・増補・註釋』版が發行される。これは定價も稍や高くなつて居るが、新らしい附録等も加へられてあるので、改造文庫の廉價版と相俟つて、兩々共に、大なる便宜を讀書界に提供するものと考へる。



本譯書の新しい附録は、土地共有村の研究『マルク』と、原著の序文四篇と、ラデツクの『科學から實行へ』の梗概との三種である。これら諸篇の内容は、目次の小見出しにチラリと目を通して下されば、誰にでも直ぐ分るとほり、いづれも甚だ重要な、無くてならぬものである。

扱これで兎にかく、社會主義の初學者と研究者とが、何はおいても、一度は必ず、是非々々讀まねばならぬ二書の中、一つだけは先づほど完全なものになつたわけである。あとは只、『宣言』の出るのが待ちどほいだけである。

『社會主義の發展、空想から科學へ』といふ表題は、ドイツ本の“Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft”を直譯したものであるが、それが英譯では“Socialism : Utopian and Scientific”（社會主義、空想的と科學的）となつて居り、フランス譯では、“Socialisme utopique et socialisme scientifique”（空想的社會主義と科學的社會主義）となつて居る。

本文各章の見出し、各章内の段の分け方と其の見出し、附録の段の分け方と其の見出し等は、總て譯者が諸書を参照して適宜に拵へたもので、原文にそくなつて居るのではない。『原註』とこゝとわつてない註釋は、總て譯者が附けたものである。中には他書の註釋をそのまま借用したのもある。猶、譯文中の、括弧内の小文字は、譯者が便宜の爲に挿入した、説明的の補足である。猶



又、文字の右側に、、、を附した部分は、原文がゲシユペルト(間隔組)になつて居る個所である。

本書著作の由來、意義、内容等については、『附録三』の『序文四種』(一六九頁以下)を熟讀せられたし。序文の位置等につき、便宜上、譯者が多少の變更を加へた事については、それぞれの部分にて御承知を願ひます。

一九三〇年一月

堺 利 彦



# 總目次

譯者の序 ..... 1

總目次 ..... V

社會主義の發展 — 空想から科學へ — ..... 1

第一章 空想的社會主義 ..... 3

一 フランス革命の意義 ..... 3

二 ブルジョアと、プロレタリアの先驅 ..... 6

三 三大空想家の出現 ..... 8

四 革命後に於ける新社會の失望 ..... 10

五 未熟な事實と未熟な思想 ..... 13

六 サン・シモン ..... 15

七 フーリエ ..... 18

八 オーエン ..... 21



九 折衷的社會主義の混成酒 ..... 28

第二章 マルクスの二大發見 ..... 31

一 辯證法と形而上學 ..... 31

二 形而上學の考へ方 ..... 32

三 辯證法の考へ方 ..... 34

四 唯物史觀 ..... 40

五 剩餘價值説 ..... 47

第三章 科學的社會主義 ..... 51

一 唯物史觀の前提 ..... 51

二 近世社會主義 ..... 52

三 社會的生産と資本家的領有 ..... 54

四 プロレタリアートとブルジョアジー ..... 59

五 生産界の無政府状態 ..... 60

六 産業豫備軍 ..... 64



七	恐慌	68
八	資本の集中、生産力の國有	71
九	勞働階級の政權掌握	75
十	自由の國	80
十一	歴史的進化の概括	84
唯物史觀について（附録一）		
一	唯物論は英國の土着兒	91
二	英國の不可知論	97
三	新カント派の不可知論	101
四	封建制度とブルジョアツ	105
五	ルーテル及カルヴァインの宗教改革	107
六	英國貴族とブルジョアツとの妥協	111
七	英佛の唯物論とブルジョアツ	114



# マルク(附録二)

ハ	ブルジョアジーと宗教的信條	117
九	ブルジョアジーの無教育と偏見	120
十	道徳的手段に依つて人民を御すべき時	125
十一	大陸ブルジョアジーの自由思想放棄	127
十二	労働階級の勝利の希望	129
一	ドイツの大昔の土地制度	135
二	民族の血縁的編成と土地の共有	136
三	マルク組合、割地、抽籤地	139
四	交替所有から私有財産	141
五	地形に強制された私有制	143
六	ローマの征服、無制限私有	144
七	共有制度の種々なる殘存	145



八	共有マルクの遺物遺法	147
九	マルク制度、都市制度、同業組合制度	149
十	マルク組織の順應力、農奴の發生	152
十一	マルクの存續、農奴制の確立まで	155
十二	資本時代、大農時代、農民の墮落	159
十三	自由農民の再建、社會的農業、農民と勞働者	162

序文四種(附録三)..... 167

原書第一版の序(エンゲルス)..... 169

原書第四版の序(エンゲルス)..... 175

英譯の序(エンゲルス)..... 177

一 この書の由來..... 177

二 經濟學的用語の説明..... 180

三 唯物史觀について..... 181



原書第五版の序（カウツキー）……………182

一 今日なほ潑漑たる生氣……………182

二 附録「マルク」中の、豫言の間違ひ……………183

三 豫言のはづれた理由……………184

四 工業の大勃興、農業への影響……………186

五 小農經營と大農經營の關係……………189

六 工業國と農業國の關係、慢性不景氣時代……………191

七 世界工業化の進捗、社會革命の思想……………193

八 農業の一新形勢、豫言の別形體での實現……………195

科學から實行へ（ラデツク、梗概）（附録四）……………199

編者のはしがき……………201

一 空想から科學への發展……………203

二 共産主義の偽造……………204



三	改良主義的幻想の没落	205
四	権力への道の追求	206
五	世界戦争の教訓	207
六	ロシア革命の教訓	207
七	プロレタリアートの獨裁	(以下略)
八	革命と反革命	
九	民主主義か、労働階級支配か	
十	ソヴェエツト、國際プロレタリアート勝利の象徴	

——總目次終——







社會主義の發展

— 空想から科學へ —







# 第一章 空想的社會主義

## 一 フランス革命の意義

近世社會主義は、先づその内容から云へば、一面には今日の社會に行はれている、有産者と無産者、資本家と賃金労働者の階級對立の認識、一面には生産界に行はれている無政府状態の認識から生じた産物である。けれども、その理論的形式から云へば、近世社會主義は、元來、十八世紀に於ける、フランスの大啓蒙學者達の主張した諸原則を、一層前進させた所の、外見上それを一層徹底させた所の、繼續として現はれている。だから近世社會主義は、その根本が如何に深く物質的經濟的の事實の上に置かれてあらうとも、他の總ての新學說と同じく、兎にかく先づありあはせの思想的材料と結びつかねばならなかつた。

フランスに於いて、來るべき革命に對し人心を開發した所の諸大人物は、皆な自ら極端なる革命家として立つていた。彼等は、如何なる種類の者であらうとも、あらゆる外來の權威を認めなかつた。宗教、宇宙觀、社會、國家制度、一切の者が最も假借なき批判に附せられた。一切の者



が道理の裁判席の前に自己の存在理由を立證するか、さもなくば、存在を斷念せねばならなかつた。理智が一切の者に對する唯一の尺度となつた。實にそれは、ヘーゲルの云つたように、世界が頭で立たされている時代であつた。<sup>(1)</sup>その意味は、先づ第一、人間の頭と、その頭の思惟に依つて發見された原則とが、あらゆる人間の行爲と社會的結合との基礎たる事を要求したと云ふのである。然し、その意味は後に又擴大されて、右の原則と矛盾する現實は、正にその上下を顛倒せねばならぬと云ふ事にもなつた。あらゆる從來の社會形體および國家形體、あらゆる傳來の舊思想、それらは總て不合理の者として塵溜に投げ棄てられた。世界は從來たゞ偏見に依つてのみ導かれて來た。過去一切の者は只だ憐憫と侮蔑にのみ値していた。今や初めて、日の光、道理の王國が現はれた。迷信、不義、特權、及び抑壓は、今日以後、永劫の眞理、永劫の正義、自然に基づく平等、及び人間不可分の權利に依つて驅逐されると云ふのであつた。

(1) フランス革命に對するヘーゲルの評語は次の通り。「正義の思想、正義の觀念が忽ちにして、勢力を占め、不正義の舊足場はそれに對して何らの抵抗をも爲し得なかつた。かくて此の正義の觀念の上に今や一つの憲法が設立され、そして今後は、一切の者がその基礎の上に立たねばならぬのであつた。太陽が天空に懸り、諸遊星がそのまわりをまわつてから以後、未だ曾て人間が頭で立ち、即ち思想で立ち、そして



それに従つて現實を作りあげるといふ話を聞いた事がない。昔しアナクサゴラスが初めて云つた。道理が、理性が、世界を支配すると。然るに人間は今や初めて、思想が精神界の現實を支配せねばならぬといふ事を承認するに至つた。これは實に燦然たる日の出であつた。總ての思索する生存物が相共に此の日を祝賀した。莊嚴なる情緒が當代を風靡した。人心の熱情が世界に漲り渡つた。今こそ神意と世界との調和が來たかのように。(ヘーゲル、歴史哲學、一八四〇年、五三三頁。)——故ヘーゲル教授の斯くの如き、危険な破壊的な學說に對し、今や正に社會主義鎮壓法を適用すべき好時期ではないか。——(原註)

譯者云。このヘーゲルの評語について、一つの疑問がある。原文の *Der Gedanke, der Begriff des Rechts* を、私は「正義の思想、正義の觀念」と譯したが、英譯には、それが *Thought, the conception of Law* となつて居り、そして次の「この正義の觀念の上に」が、*In this conception of Law* となつて居る。そうすると、英譯は、「思想——即ち法則の觀念——は」といふ意味に原文を讀んで居るのである。即ち *Der Gedanke, — der Begriff des Rechts* と見たのである、然るに譯者はそれを、*Der Gedanke des Rechts, — der Begriff des Rechts* と讀んだわけである。この英譯はエンゲルス自身も必ず見て居ると思はれるので、そこに疑問が起るのです。

然し我々は今知つて居る。この道理の王國<sup>(2)</sup>はブルジョア<sup>(2)</sup>の王國を理想化したものに過ぎな



かつた。この永劫の正義はブルジョア的正義として實現された。この平等は法律の前に於けるブルジョア的平等に歸着した。ブルジョア的所有權は、最も根本的なる人權の一つとして宣言された。そして道理の國家、ルソーの社會契約説が實現されたが、それは只ブルジョア的民主共和制としてのみ實現され得た。斯くて十八世紀の大思想家等も其の總ての先行者と同じく、それぞれの時代から荷はせられた制限を超越する事は出来なかつたのである。

(2) 『王國』の原語は Reich で、『帝國』でもあり、只『國』でもある。自然界に應用した場合には、生物界、植物界、礦物界などの『界』に當る。英語の Kingdom には King (王) といふ言葉が現はれて居るが、植物界を植物王國と云つて平氣で居る事を思へば、王のないフランス國を、道理の王國、ブルジョアツの王國と言つた所で、別に不思議はない筈である。

## 二 ブルジョアと、プロレタリアの先驅

然るに當時、封建貴族と、それ以外の一般社會の代表者を以て任ずる商工市民<sup>(1)</sup>(即ち元來のブルジョア階級)との對立と相並んで、別に搾取者と被搾取者、富裕な遊惰者と貧困な労働者の、一般的對立があつた。この事情のあつたが爲にこそ、ブルジョア<sup>(1)</sup> (Bourgeoisie) の代表者等は、特



殊な一階級を代表するのではなく、疾苦に悩む人間全體を代表するものとして、自ら標榜する事が出来たのである。然るに又、ブルジョアジー(Bourgeoisie)は其の發生以來、既に自分の對立物を負はされていた。資本家は賃金労働者なしには存立する事が出来ない。だから中世の同業組合(2)の商工市民が近世のブルジョア(即ち資本家)に發達したのと同じ比例を以て、その組合の弟子職人と、組合外の日傭稼が、プロレタリア(3)(即ち近世労働者)に發達した。それで大體上、ブルジョアジーは貴族との戦ひに於いて、それと同時にその時代の諸種の労働階級の利益をも代表すると稱する事が出来たのであるが、それでも猶ほ總てのブルジョアの大運動には、いつでも必ず、近世プロレタリアの先驅として、大なり小なりの發達を遂げた所の、その階級の獨立的爆發が伴なつていた。例へば、ドイツの宗教改革および農民戦争時代に於ける再洗禮派(4)およびトマス・ミュンツェル(Thomas Münzer)、イギリスの大革命に於ける平均黨(5)、フランスの大革命に於けるバブーフ(6)(Babouf)の如き。

(1) 商工市民は即ち元來のブルジョア階級である。原語は Bürger 或は Bürgertum, 英語では Burgher, Burghers である。それが後のブルジョア(Bourgeois)で、それを階級として見た時、ブルジョアジー(Bourgeoisie)となる。



(2) 同業組合はドイツ語のツunft (Zunft)、英語のギルド (guild) で、中世の商工市民は皆、この組合組織で働いて居たのである。然し近世のブルジョア (即ち資本家) に發達したのは、主として彼等の中の大商人であつた。小さな手工業の職人は大抵みな亡びてしまつた。

(3) プロレタリア (Proletarier, Proletarian)、國語に依つて語尾が少しづつ違つている。それを階級として見た時、プロレタリアート (Proletariat) となる。

(4) 再洗禮派はキリスト教の一派で、その豫言者ミュンツェルが、ルーテルの宗教改革の不徹底に反抗して、原始キリスト教の共產主義を理想とする、農民運動を起したのであつた。

(5) 「平均黨」は一四七〇年に於ける、アイルランドの農民一揆レヴェラアス (Levellers) の事。

(6) バブーフは、絶對平等の共產主義を唱道して、一七九七年、ギロチンに上された人。

### 三 三大空想家の出現

右の如き、未發達な階級の革命的叛亂に對して、亦それに相應する理論的發現があつた。即ち十六七世紀には理想的社會状態の空想的描寫<sup>(1)</sup>があり、十八世紀には、既に直接の共產主義的學說 (モレリー及びマブリー)<sup>(2)</sup>があつた。平等の要求は、こゝではもう政治上の權利に限られて居ら



ず、個人の社會的地位にまでも擴大されていた。癡絶さるべきものは階級的特權ばかりでなく、階級差別その者であつた。かくて、禁慾的な、一切人生の快樂を否認する、スバルタ流の共產主義が、この新學説の最初の發現形態であつた。<sup>(3)</sup>

(1) 有名なモアの『ユトピヤ』や、カンパネラの『太陽の都』などを指したものと考へられる。

(2) モレリー (Morelly) も、マブリー (Mably) も、事跡は餘り傳はつて居ないが、共に十八世紀の有名な著述家で、殊に後者はバブーフに影響を與へた人である。

(3) 當時はまだ生産力の程度が低く、總ての人を裕福に生活させる事は不可能と考へられたので、自然、禁慾的な主張が生じたのである。

次に三大空想家が現はれた。サン・シモン。この人に取つては、プロレタリア運動と並んで、ブルジョア運動が猶幾分の力を有していた。<sup>(1)</sup> フーリエ。及びオーエン。この人は資本家的生産の最も發達した國 (イギリス) に於いて、そしてそれから生じた反目對立の影響の下に於いて、フランスの唯物論と直接の關係を持ちつゝ、階級差別癡止の提唱を組織的に發展させた。<sup>(1)</sup>

(1) この意味は後の第六節『サン・シモン』と、第八節『オーエン』を讀めば自然にわかる。

この三人に共通する點が一つある。彼等は皆、丁度その頃、歴史的に産出された所の、勞働階



級の利益の代表者として現はれなかつた。彼等は、かの啓蒙學者と同じく、先づ特殊な一階級を解放しようとするのでなく、一舉にして全人類を解放しようとした。彼等は又同じく、道理の王國と永劫の正義を實現させようとした。但し彼等の王國は、啓蒙學者のそれと比べて、天地隔絶のものであつた。彼等にとつては、啓蒙學者の學理に依つて立てられたブルジョア社會も、全く不合理、不正義のものであり、従つて封建制度および一切前代の社會状態と同じく、直ちに塵溜に放りこまるべきものであつた。今日まで純理と正義が此の世界に行はれなかつたのは、只その二者が正しく認識されなかつたからの事である。從來只だ不足したものは天才ある個人であつたのだが、それが今正に出現して眞理を認識したのである。そしてその天才の今ま出現した事も、その眞理の今ま正に認識された事も、歴史發展の連鎖として必然的に起る不可避の事件ではなく、全く只だ一個の幸運である。故に彼が今から五百年前に生れて、迷妄、鬭争、苦悶の五百年を此の人類から救ふといふ事も、全く無いとは限らなかつたのである。

#### 四 革命後に於ける新社會の失望

我々は、革命の先驅者たる十八世紀のフランス哲學者達が、一切萬事に對する唯一の審判者と



して如何に道理に訴へたかを見た。合理的の國家、合理的の社會が建設さるべきであり、その永劫の道理と矛盾する一切の事物は假借なく排除さるべきであつた。然るに我々は又、この永劫の道理が、現實に於いては、當時ブルジョアに發達しつゝあつた所の、中流市民の心意を理想化したものに過ぎない事を見た。そこでフランス革命がこの合理的社會、この合理的國家を實現させた時、勿論その新制度は以前の社會状態に比べては合理的であつたに相違ないが、決して絶對に合理的の者とはならなかつた。

合理的國家は全く崩壊した。ルソオの社會契約説は恐怖時代の中にその實現を見た。そこで自分の政治的能力に信頼を失つたブルジョアは、先づ執政官政治の腐敗の中に逃れ、遂にはナポレオンの専制政治の保護の下に隠れた。斯くて期待された永劫の平和は、際限なき征服戦争に轉化した。合理的社會は少しもうまく行かなかつた。貧富の對立は、社會の一般的繁榮の中に解け去るどころでなく、却つて兩者間の橋渡しをしていた所の、同業組合その他の特許制度が廢止された爲、又兩者の對立を緩和していた所の、教會の慈善事業が廢止された爲、それが一層激化された。『財産所有の自由』は封建制度の桎梏を免かれて今や正に眞實となつたが、それは小市民および小農民に取つては、大資本家および大地主の壓倒的競争の下に押しつぶされて、その小財産



を直ちにそれらの大旦那連に賣り渡す事の自由であり、従つてそれは小市民および小農民に取つては『財産から離れる自由』となつていた。斯くて資本家的基礎の上に立つ産業の繁榮は、勞働大衆の貧困と悲慘を以て社會存立の條件たらしめるに至つた。カーライルの云つた様に、段々と現金勘定が社會を結びつける唯一の鎖の環となつた。犯罪の數が年と共に増加した。先に白晝公然として行はれた封建的罪惡は、絶滅しないまでも、今は兎にかく後ろの方に押しやられたが、その代り、從來祕密の中に行はれていたブルジョアの罪惡が、今度は盛んな勢ひで茂りだした。商業は段々烈しく詐欺の術となり、革命的合言葉の『博愛』は、競争の戰場に於ける奸策や嫉妬として實現された。暴力的壓伏が去つて不義惡徳がそれに代り、社會的勢力の第一たる劍が隠れて、黄金がそれに代つた。初夜の權<sup>(1)</sup>は封建の領主からブルジョアの製造家に移された。賣淫は前代末聞の増加率を示した。そして婚姻そのものは、從來と同じく、賣淫の法律上に承認された形式、——即ちその正式の外装——として存續し、加ふるに豊富なる姦通を以て補足された。

(1) 中世の領主は、領内の農奴が結婚する時、その「初夜」を試みる權利を持つていた。その起原は、太古に於いて一夫一婦制が初めて行はれかけた時、婦人が一男子の私有となる以前、先づ全社會を代表する會長や神官の前に、謝罪的の、或はお初穂的の意味を以て、其の初夜を捧げるといふ習慣にあるのだから



うと思はれるが、後世の實際的意義としては、單に領主の絶對支配權を明示する一つの儀式だつたに相違ない。

之を要するに、『道理の勝利』から生れた所の社會上および政治上の諸制度は、かの啓蒙學者達の燦爛たる期待と約束に比べて、苦い失望のポンチ畫であつた。この時、只だ望まじきは、この失望を明言する人物であつた。そしてそれが世紀の回轉と共に現はれた。即ち一八〇二年には、サン・シモンの『ジエネバ書簡』が現はれ、一八〇八年にはフリーリエの第一の著述が現はれ(但し彼の學說の基礎は既に一七九九年から起つて居るのだつたが)、一八〇〇年一月一日には、ロバート・オーエンがニュー・ラナークの工場經營に着手した。

## 五 未熟な事實と未熟な思想

然しながら當時、資本的生産方法、及びそれに伴ふブルジョアジーとプロレタリアートの對立は、まだ頗る發達不足であつた。大工業は、この頃はじめてイギリスに起つたのだが、フランスにはまだ全く知られて居なかつた。けれども此の大工業が、一方には、その生産方法の變革、即ちその資本家的性質の除去を絶對の必然と爲す所の矛盾、—その大工業から生じた階級と階級との



間の矛盾ばかりでなく、又それから作りだされた生産力と交換形式との矛盾——を發展せしめ、そして又一方には、その巨大な生産力の中に、正にその矛盾を解決すべき手段方法をも發展させるのである。だから若し一八〇〇年の頃を以て、新らしい社會制度から生ずる其の矛盾が初めて現はれかけた時だとするならば、その矛盾を解決する手段方法についても又、遙かに善く其の事があてはまるのである。パリの無産大衆は、恐怖時代の間、一時支配權を掌握して、それが爲、ブルジョアジーの意に反してすらも、ブルジョア革命を勝利に導き得たのであるが、然し彼等は只それに依つて、彼等の支配權を維持する事が、當時の状態の下に於いて如何に不可能であるかを立證したのであつた。プロレタリアートはこの時はじめて無産大衆の間から分離して、新階級の幹となりかけたのだが、彼等はまだ全く獨立した政治運動の能力を缺き、壓迫の下に苦惱するといふ身分であつて、自ら助ける能力を缺くが爲に、どうしても外部から、或は上方から、助を與へられるより外は無いのであつた。

この歴史的情勢が、又かの社會主義創設者を支配した。即ち未熟な資本家的生産状態と、未熟な階級状態とに相應する、未熟な學說が生じた。社會問題の解決法は、當時まだ未發達な經濟關係の中に潜んで居たのだが、彼等はそれを頭の中から作りだそうとした。社會は惡事ばかりを現



出している。之を除去するのが道理心の任務である。故に問題は、完全な新社會制度を發明して、宣傳の方法に依り、出来る場合には模範的實例に依り、外部からそれを社會に課する事であつた。然るに其の新社會制度は固より空想に墮したものであるから、その細目が完備すればするほど、いよ／＼ますます／＼純粹な幻想に陥ることを免かれ得なかつた。

これだけの事さへ確定すれば、我々はもう一刻も、この既に全く過去に屬した方面の問題を論議する必要はない。我々はそれを世間の群小文士に委して、今日では只だ我々を微笑せしめるに過ぎない所の其の幻想に對して、彼等が勿體らしくそれを詮索するに任せ、又斯くの如き『狂的思想』に比べて、彼等自身の平明なる考へ方の優越を誇らせて置けばいい。我々としては寧ろ只、この幻想の殻を破つて到る處に迸り出てる所の、そしてかの俗物者流が全く認め得ないでいる所の、あの天才的大思想と其の萌芽とを喜ぶものである。

## 六 サン・シモン (Saint Simon)

サン・シモンはフランス大革命の子で、大革命の爆發の時、まだ三十歳になつて居なかつた。

この革命は、その當時まで特權を與へられていた怠惰階級、即ち貴族と僧侶に對する、第三階級



—即ち生産と商業に従事する國民の大群—の勝利であつた。然しこの第三階級の勝利が、實はその階級中の一小部分の獨占的勝利であり、その階級中の特權ある社會層、即ち有産ブルジョアジ—の政權獲得である事が、間もなく暴露された。實際、ブルジョアジ—は、まだ革命の進行中、貴族僧侶から土地を沒收した後、それを民間に賣出した投機事業の爲にも、又軍事請負に依つて國民に對して行つた詐欺手段の爲にも、誠に急激な發達を遂げた。そしてこの詐欺師等の支配こそ、即ち執政官時代に於いてフランス國と革命とを滅亡に瀕せしめ、従つて又ナポレオンにクーデターの口實を與へたものであつた。

だからサン・シモンの頭の中では、第三階級と特權階級との對立が、『勞働者』と『怠惰者』との對立といふ形を取つていた。その怠惰者とは、昔の特權者ばかりでなく、亦總ての、生産と商業に参加しないで、金利ばかりで生活する者であり、又その勞働者とは、賃金勞働者ばかりでなく、亦た製造業者、商人、銀行家などの事であつた。これらの怠惰者が智力的指導者、政治的支配者たる資格を失つた事は疾くから明白で、それが革命に依つて最終の決定を與へられた。又無産者がその資格を持たない事は、恐怖時代の經驗に依つて證明されたものと、サン・シモンに見えた。然らば誰が指導し支配すべきであるか。サン・シモンに依れば、科學と産業、その二つが



新らしい宗教的の紐に依つて結合されて、それが宗教改革以後、久しく破壊されていた宗教思想の統一を回復すべきものであつて、それは必然に神祕的な、そして嚴密に宗教政治的な『新キリスト教』であつた。然るにその科學とは學者を意味し、その産業とは主として活動的なブルジョア、製造業者、商人、銀行家などを意味していた。そこでこのブルジョアは即ち一種の官公吏、一種の社會的信任者に變形すべきものであるが、それで矢張り労働者と對立して、命令權あり、且つ經濟的にも特權ある地位に置かるべきであつた。殊に銀行家は、信用の調節に依つて社會的生産の總體を管理するの任務に當るべきであつた。この考へは全く、フランスに於いて大産業が、――従つて又ブルジョアとプロレタリアートの對立が、――初めて發生しかけた時代に適合するものであつた。然しサン・シモンが特に重きを置いたのは次の一事である。即ち彼が到る處に於いて、何物にも増して心を引かれるのは、『最も多數で最も貧困な階級』の運命である。

サン・シモンは既にその最初の著述なる『ゼネバ書簡』に於いて、『總ての人間は労働すべし』と提言している。彼は又既に同書の中に於いて、恐怖時代が無産大衆の支配であつた事を知つてゐる。そして彼はその大衆に向つて、『見よ、諸君の同志がフランスを支配した時、そこに何事が生じたか。彼等は饑餓をもたらしたではないか』と云つてゐる。然し彼がフランス革命を階級戰



争と解し、而もそれが、單に貴族と商工民の間だけでなく、貴族と商工民と無産者の間に於ける階級戦争だと解した事は、一八〇二年の當時として、最も天才的な発見であつた。一八一六年には、彼は政治を生産の科學と解釋し、政治が全く經濟の中に吸収さるべき事を豫言している。經濟事情が政治組織の基礎だといふ思想は、こゝではまだ、ほんの萌芽として現はれて居るとして、人に對する政治的支配が、物に對する管理、及び生産過程の經營に變ずるといふ思想、從つて又、近來に至つて議論のやかましい『國家の廢止』といふ思想が、既にここで明かに表白されている。

彼は又、一八一四年、聯合軍がパリに侵入した直ぐ後、及び更に一八一五年、百日戦争の間に於いて、ヨーロッパの繁榮および平和の唯一の保證として、フランスとイギリスの同盟、及び其次には此の二國とドイツとの同盟を提唱して、同時代の人々に對する卓越を示した。一八一五年の當時、フランス人に對してウオトタルの戦勝者たるイギリスとの同盟を説くのは、歴史的先見と共に、實に亦た多大なる勇氣を要する事であつた。

## セ フーリエ (Charles Fourier)



我々はサン・シモンに於いて、その博大な天才的眼界の中に、後の社會主義者等が唱へた所の、嚴密に經濟的でない、殆んど總ての思想が、萌芽として含有されて居る事を發見するが、フリーリエに於いては又、純フランス式の奇抜さを持つた、而かもそれが爲に深酷味を失はない、社會現狀の批評を發見する。フリーリエはブルジョアジーに對し、又革命前の熱狂的なブルジョア豫言者、及び革命後の偏頗なブルジョア頌德者に對し、その言質を捕へる。彼はブルジョア世界に於ける物質的および道德的の醜態を假借なく摘發する。彼はそれと並べて、前代の啓蒙學者達の燦爛たる約束、——道理ばかりが行はれる筈の社會、幸福の充ちあふれる文明、人間の限りなき完成などいふ約束——を擧げ、更に彼と同時代の、ブルジョア思想家連の美辭麗句を擧げる。そして彼は、如何にその最も花々しい言葉が到る處に於いて最も哀れな現實と對應して居るかを示し、痛烈な皮肉を以て、この救ふに道なき文飾的大失敗を罵倒している。

フリーリエは單なる批評家でない。彼れのいつも快活な性質は彼を諷刺家と爲し、而も古今を通じての最大諷刺家の一人と爲した。彼は力もあり艶もある筆致を以て、革命の没落と共に榮えだした詐欺的投機、及び當時のフランス商業界に於ける一般の商賣氣質を描寫している。猶それよりも見事なのは、兩性關係のブルジョアの形態、ブルジョア社會に於ける婦人の地位に對する彼



れの批評である。或る一つの社會に於いて、その婦人解放の程度は即ちその一般的解放の自然的尺度であるとは、實に彼が初めて喝破した所である。

然しフーリエの最大な點は、社會の歴史に關する彼れの解釋である。彼は今日までの社會の全過程を四つの發展段階に分つてゐる。即ち蒙昧時代、野蠻時代、家長時代、文明時代。この最後の者は今日の謂ゆるブルジョア社會、即ち十六世紀以後、行はれてゐる所の社會制度に相當するものである。そして彼は論證する。『文明社會は、野蠻時代に於いて單純に行はれてゐた各種の惡徳を、複雑な、曖昧な、意義の不明な、偽善な存在體に作りあける。』又文明は常に『惡循環』<sup>(1)</sup>を以て、即ち矛盾を以て進行し、絶えず新たに矛盾を作りだしては、それを解決する事が出來ないで、つまりいつでも、自分がそれに到達しようと思ひ、或はそれを獲得しようすると稱する所のものゝ、正反對に到達する。例へば『文明の下に在つては、豊饒過多、その者の間から貧困が發生する。』

(1) 原語 fehlerhaft Kreislauf 或 Zirkelschluss 即ち循環の意味である。英語の vicious circle を考へ合せて、『惡循環』といふ譯語を作つて見た。

斯くてフーリエは、同時代のヘーゲルと同じく、最も巧妙に辯證法<sup>(1)</sup>を使用している。彼はその



同じ辯證法を用いて、人間が無限に向上するといふ世論に反對し、總ての歴史的段階がその向上期を有すると共に、又その向下期を有することを論じ、且つその考へ方を全人類の將來にも適用した。カントが地球の究極的破滅といふ考へを自然科学の中に入れたと同じく、フーリエは人類の究極的破滅といふ考へを歴史觀の中に入れた。

(1) 辯證法の事については、第二章に委しい説明がある。

## ハオーエン (Robert Owen)

フランスに於いて革命の暴風が全土に吹きすさんでいる間、イギリスに於いては、それよりも平靜な、だからと云つてそれより力の弱くはない、大變革が行はれていた。蒸汽と新らしい製造機械が手工的製造業<sup>(1)</sup>を近世的の大工業に變化させ、それに依つてブルジョア社會の全地盤を革命しつゝあつた。手工的製造業時代の遅々たる發達の歩みは、今や生産界に於ける本當の革命的爆進時代<sup>(2)</sup>と化した。社會は不斷増大する急速力を以て、大資本家と無産労働者とに分裂した。その中間には、昔の安固な中流階級の代りに、今は不安固な職人と小商人の大群が、全國中の最も動搖しやすい部分として、覺束ない存在を續けていた。



(1) 原語マヌファクトール (Manufaktur)。これは普通に製造と譯され、手工的製造も機械的製造もその中に含まれているが、元來は機械的製造以前の手工的製造を意味したもので、マヌは即ち手の事である。然し中世の純粹な手工業が個人的であるのに反し、マヌファクトールは多數の職工が大規模の工場で分業的に労働するのだから、それと區別する意味に於いて「工場的手工業」と譯する場合もある。第一八二頁「英譯の序」の中、「二、經濟的用語の説明」を見よ。

(2) 原語 Sturm = und Drangperiode は、十八世紀(一七七〇—一八〇年)に猛烈を極めたドイツ文學革命運動時代の事。

この新生産方法は、まだその興隆期のホンの初に屬していた。それはまだ、當時の状態の下に唯一可能なる、正規正常の生産方法であつた。けれども當時既に、それが爲、目にあまる社會的害惡が生じつゝあつた。即ち大都市の貧民窟に於ける放浪者の群集。あらゆる風俗習慣の拘束力、上下主従の關係、家族關係等の弛緩、労働過度、殊に恐るべき程度に於ける婦人小兒のそれ。労働階級が田舎から都會へ、農業から工業へ、安固な生活から日々變化する不安な生活へ、つまり急激に全く新たな事情の中へ投げこまれた結果としての一般的墮落。

この時に當つて、廿九歳の青年製造家が改革者として出現した。この人は小兒の様な、崇高



とも云ふべき、單純な性質を有し、そして同時に、人間の指導者たる稀有の天稟を有していた。彼、即ちロバート・オーエンは、唯物論的啓蒙學者の學說を取り、人間の性格が一方には遺傳の産物であり、他方には其の生存中に於ける、但し殊にその發育期に於ける、境遇の産物である事を信じた。<sup>(1)</sup>

(1) マルクスの『フオイエルバ論要項』(エンゲルス著『フオイエルバ論』の附録)の第三項は、この参照になる。「人間は境遇と教育との産物であり、従つて變化した人間は、別の境遇と、違つた教育との産物であるとする唯物論は、その境遇こそ人間から變化されねばならぬものである事、又その教育者自身が教育されねばならぬものである事を忘れてゐる。従つてこの唯物論は、必然的に、社會を二つの部分に分ち、その中の一方を社會の上に超越させる事になる。(例へばロバート・オーエンの場合。)境遇の變化と、人間の活動、即ち自己變化との一致は、革命的實踐としてのみ、我々に把握され、合理的に理解され得るものである。」

この譯文は佐野文夫氏のものに依つた點が多く、又終りの部分は、後にリヤザノフ氏がマルクスの手帳から見つけたのだしたといふ原文の形に依つた。エンゲルスは右の原文に對し、多少の説明的變更を加へておいたものと考へられる。いづれにしても、この原文は、マルクスの覚え書に過ぎないので、極めて難解な字句になつてゐる。



彼れと同階級者は大てい皆、かの産業革命の中に只だ紛亂と混沌を見て、その間に火事場泥棒を働らき、俄分限になる事ばかり考へていた。然るに彼は其中に於いて、得意の理論を實行して、それに依つて混沌の中に秩序を立てるべき機會を見た。彼は初めマンチエスタで、五百人の労働者を使用する或る工場の支配人として、早くからそれを試みて好成绩を得て居たが、一八〇〇年から一八二九年までの間、彼は更にスコットランドのニューラナークで、合資會社の業務擔當社員として大紡績會社を經營し、前同様の遣口ではあるが、前よりは一層大なる活動の自由を持ち、遂にその成功に依つて名聲を全ヨーロッパに博した。元來、彼れの労働者は種々雑多の分子から成り、且つその大部分は甚だしく墮落した者で、それが漸次に増加して二千五百人といふ多數になつたが、彼はそれを一個の模範的植民地と化し、そこには泥酔者も、警察官も、裁判官も、訴訟沙汰も、救貧法も、慈善も、全くその跡を絶つに至つた。そしてそれが全く、人間を人間らしい境遇に置き、殊に注意して發育中の兒童を教育した結果であつた。彼は幼稚園の案出者で、初めてそれをニューラナークに開設した。小兒は二歳から幼稚園に来るのであつたが、彼等は皆な家に歸ることが厭がるほど、楽しくそこで遊ばされていた。又彼の競争者等は、一日十三四時間その職工を働かせて居たのに、ニューラナークでは僅かに十時間半の労働であつた。綿花貿易に



恐慌が起つて、四個月間休業した時でも、休業中の労働者はその期間を通じて賃金の全額を支拂はれた。そしてそれだけの事をしながら、會社はその價値に於いて二倍以上となり、最後までその株主達に多大の利益を配當した。

それでもオーエンはまだ満足しなかつた。彼が労働者の爲に作りだした其の生活も、彼れの眼中に於いては、まだ迎も人間らしいものではなかつた。『あの人は私の奴隷であつた。』彼が彼等に與へた比較的良好な生活状態も、まだ迎も彼等の性格と智力とを、各方面に亘つて合理的に發達させる事が出來ず、況んや各自の生活力を自由に發揮させる事など思ひも寄らなかつた。『然るに此の二千五百人分の労働が、半世紀足らずの昔なら、恐らく六十萬の人数を要したであらうと思はれるほど、それほど大きな現實の富を社會の爲に産出しつゝあつた。そこで私は自分に問うた。二千五百人の消費した富と、六十萬人の消費した富との差は、どうなつたかと。』<sup>(1)</sup>その答は明白であつた。その差は即ち、この會社の拂込資本に對する五歩の利子として、更にそれ以外、三十萬ポンド以上の純益として、持主達に支拂はれたのであつた。そしてニューラナークに於ける此の事實は、イギリスのあらゆる工場に於ける、ヨリ大なる程度の事實であつた。『若しこの、機械に依つて産出された新らしい財産が無かつたならば、かのナポレオンを仆して貴族主義



を擁護したヨーロッパ戦争は、到底遂行され得なかつたであらう。そしてその新らしい力が即ち労働階級の創作物であつた。<sup>(2)</sup>」だからその新らしい力の成果も亦た労働階級に屬するものである。この新らしい強大な生産力は、從來只だ個人を富まし、民衆を奴隸化する爲に役立つていたが、オーエンに取つては、それが社會的新建設の基礎となつた。即ちこの生産力は實に總人の共同財産として、總人の共同福利の爲に運用さるべき筈のものであつた。

(1)(2) 『心と行ひとの革命』から。これは「ヨーロッパの赤色共和主義者、共產主義者、社會主義者」の全部に宛てた覺書で、一八四八年フランス假政府に送られ、又イギリスのヴィクトリヤ女王とその責任顧問等に送られたものである。——(原註)

斯様に、オーエンの共產主義は、純然たる事務的方法により、云はゞ商業的打算の結果として成立したのである。それは飽くまで實際的特質を以て一貫していた。従つて彼は一八二三年、アイルランドに於ける困窮の救済策として共產植民地を提案した時、その建築費、年々の支出、及び見積りの收入について、完全な豫算を編成した。斯くて彼れの將來に對する明確な設計には、その細目の技術的考案が、平面圖から前面圖、側面圖、鳥瞰圖に至るまで、悉く専門的智識に依つて作られて居たので、そのオーエン式社會改良案が一たび採用された以上、専門家の見地から



さへも、其の細目の個條に反對すべき點が殆んど無かつたと云ふ。

オーエンが共產主義へ進出したのは、彼れの生涯の旋回點であつた。彼が單に一個の博愛家であつた間は、彼は只だ財富、稱賛、名聲、榮譽を得るばかりであつた。彼はヨーロッパに於ける最も人氣のある人物であつた。彼と同階級の人ばかりでなく、政治家も王侯も皆な賛意を以て彼の言に傾聽した。然るに、彼が共產主義を標榜するや、形勢は忽ち一變した。彼に取つて、特に社會改良の道を塞ぐべき三大障礙は、私有財産と、宗教と、現行の結婚制度とであつた。それらを攻撃する時、彼の遭遇すべきものは、公社會からの破門、全社會的地位の喪失である事は、善く分つていた。然るに彼は少しもそれらの事に頓着せず、無遠慮な攻撃を續けたので、遂に豫期した事が起つて來た。彼は公社會からは追放され、新聞紙からは黙殺され、その全財産を犠牲にした所の、アメリカに於ける共產的實驗には失敗して、それから直接に労働階級に向ひ、其後なほ三十年、彼等の間に活動した。斯くてイギリスに於ける、労働者の利益の爲の、あらゆる社會運動、あらゆる實質的進歩は、皆オーエンの名に結びつけられている。彼はそれから五年間の努力の後、一八一九年、遂に工場に於ける婦人小兒の労働を制限する最初の法律を制定させた。彼は又、イギリスの總ての労働組合が一個の大同盟に團結した時の、最初の大會の議長であつ



た。彼は又、完全な共産主義的社會制度に達する過渡的方策として、一面に共同組合（消費組合（および生産組合）を起した。この事業は、その時以後、少なくとも商人も製造家も不用なものだといふ、實際上の證據を提供した。彼は又一面に労働賣店、即ち労働時間を單位とする労働紙幣に依つて労働生産物を交換する設備を作つた。この仕組は必然的に失敗の運命を有するものではあつたが、然しそれからズツト後年に於ける、ブルードンの交換銀行をスツカリ豫見したわけであつて、只明かにそれと違ふ所は、あらゆる社會的害惡の萬能藥として立つたのでなく、モット、モット根本的な社會改革への第一歩を意味していた點である。

## 九 折衷的社會主義の混合物

これら空想家の考へ方は、その後永く十九世紀の社會主義思想を支配し、今なほ其の一部を支配している。極近來に至るまで、フランス及びイギリスの社會主義者は皆な之を奉戴していた。初期のドイツ共産主義も、<sup>(1)</sup>—ワイトリングをもこめて—同じく之に屬していた。彼等すべての者に取つては、社會主義は絶對の眞理と、道理と、正義の表現であつて、彼等は只それを發見して、それ自身の力に依つて、全世界を征服しようとしたのである。又絶對の眞理は、時間、空間、及



び人間の歴史的發展から獨立して居るのだから、何時何處でそれが發見されるかは、單なる偶然だと考へられた。然るにそれほど、絶對の眞理と道理と正義が、各派の創立者に依つて、それぞれに異なつてゐる。所が、この各人各様の、絶對の眞理と、道理と、正義が、更に又その人々身の主觀的の判斷や、生活の條件や、智識と修養の程度やに依つて制約されるのだから、この絶對諸眞理の衝突に於いては、只だお互ひに疲れ弱るより外に解決の道は無いのである。従つてその衝突から生ずるものは、一種の折衷的平均的社會主義より外はなく、それが實際上、今日まで、フランス及びイギリスの、大抵の社會主義的勞働者の頭を支配して居たのである。そこでこの社會主義は、各派創立者の、成るべく反對論の少ない、現代批評、經濟論、及び將來社會の描寫から成る所の、多種多様を極めた諸傾向の混合物であり、又その各組成分子が、谷川の丸い小石の様に、論戰の流に摩擦されて、その固有の鋭い圭角を失ふにつれて、段々容易に作成される所の混合物であつた。故に社會主義を科學とする爲には、先づそれを現實的な基礎の上に置く必要があつた。

(1) ワイトリングは、マルクス等とは同時代までドイツに活動していた共產主義者。



# 第二章 マルクスの二大發見

## 一 辯證法と形而上學

斯かる處に、十八世紀のフランス哲學と相並んで、及びそれに續いて、ドイツの新哲學が勃興して、ヘーゲルに至つて其の頂點に達した。ヘーゲル哲學の最大の功績は、思惟の最高形式として再び辯證法<sup>(1)</sup>（ヂヤレクチーク *Dialektik*）を採用した事であつた。ギリシヤの古哲學者は皆な生れながらの、生えぬきの辯證家で、その中、最も該博の智識を有していたアリストテレスは、既に當時に於いて、辯證法的思惟の最も根本的な諸形式を考究していた。然るに其後の新哲學は之に反し、辯證法の顯著な代表者（例へばデカルト及びスピノザの如き）もあるにはあつたが、特にイギリスの影響に依つて、段々と謂ゆる形而上學（タメファイジーク *Metaphisik*）の考へ方に固定してしまひ、従つて十八世紀のフランス人も、少なくとも特に哲學的な著述に於いては、殆んど全くその勢力の下に在つた。但し狹義に云ふ哲學の範圍外に於いては、フランス人は矢張り辯證法の名著を出して居る。かのヂドロオの『ラモウの子孫』及びルソーの『人間不平等起原論』



の如き、其の實例として想起するに足る。我々は今茲に、簡單に此の二個の思索法の本質を説明する。

(1) 辯證法は昔のギリシヤ語のヂャレクチクから來たもので、元來は會話術、辯論術などの意味であつた。然るにそれが次第に哲學上の推理方法として、六かしい意味を持つ事になり、或は修辭學と目され、或は論理學と同義になり、或は又詭辯術として用いられた。それで中世から近世にわたり、大體上、ヂャレクチクは即ち論理を意味し、殊に巧妙なる討論辯駁の術を意味し、一面には詭辯的の胡麻化し論法を意味していた。然るにそれがヘーゲルに至り、初めて「推理の最高形式」として完成されたわけである。

## 二 形而上學の考へ方

我々が一般自然に對し、人間の歴史に對し、我々自身の智的活動に對して考察する時、我々は先づ、何物も同形を保たず、同處に止まらず、同質を存せず、常に運動し、變化し、出現し、消滅して、諸種の關係と諸種の相互作用とが、無限に混亂している所の畫面を見る。故に我々は先づ此の總畫面を見るので、其の個々の部分は多少ともまだ其の後方に引込んで居るのである。我々は運動し、推移し、相關する所の事物を見るよりは、寧ろ多く其の運動と推移と關係とを見る



のである。この原始的な、素朴な、而も實際に正確な世界観は、即ち古代ギリシヤ哲學の世界観であつて、ヘラクリートが初めて明白に論述した所である。曰く、萬物は在り又在らず。何となれば萬物は流動して、常に變化し、常に生滅しつゝあるが故に。

然し此の世界観は、現象の總畫面の全般的性質を正しく示すには足るけれども、其の總畫面を組み立てゝいる所の細目を説明するには不充分である。そして其の細目を説明し得ない間は、我々は其の總畫面に對して矢張り明瞭な觀念を有し得ないのである。そこで我々は此の細目を理解する爲に、事物を其の自然の、若しくは歴史的の關係から分離させて、個々別々に其の性情、其の特殊の原因結果等について、考察しなければならぬ。之が先づ第一に、自然科學と歴史研究との任務である。そして是等の諸學科は、古代ギリシヤに於いては、何よりも先づ其の研究に對する材料を蒐集するのであつたから、其の地位はまだ當然、甚だ低い者であつた。凡そ何等かの批判なり、比較なり、種別、等級、部門の排列なりが行はれる前には、必ず或る程度の、自然のおよび歴史的な材料が集められなくてはならない。故に確實な自然研究の端初は、先づアレキサンドリヤ時代のギリシヤ人に依つて開かれ、後ち中世時代に於いて更にアラビヤ人に依つて發展させられたが、而も本當の自然科學は十五世紀の後半に始まり、それから後、不斷増加の速力を以



て進歩した。『自然』を其の個々の部分に分解する事、種々の自然過程と自然物とを明確な種別に分類する事、生物體内部の種々なる形態を解剖的に研究する事、これらが自然界の認識に於いて最近四百年が我々にもたらした所の、大進歩の基礎条件であつた。然るに此の研究法は、矢張り其の遺産として、自然物及び自然過程を、其の全部の總關係から分離させて、個別的に觀察する習慣を我々に残した。即ち自然を觀察するに、其の運動に於いてせずして其の靜止に於いてし、根本的に變化する者とせずして常住不變の者とし、其の生に於いてせずして其の死に於いてするのであつた。そして此の見方がベーコンとロツクとに依つて、自然科學から哲學に移された時、前世紀(十八世紀)に特殊なる偏狹思想、即ち形而上學的の考へ方が生れたのである。

形而上學者に取つては、事物とそれの思想的模寫たる觀念とは離れ離れのもので、一ツづゝ別々に考察さるべきものであり、一定不變の、固定した研究の目的物なのである。彼は絶対に相容れざる對立に於いて事物を考へる。彼の言葉は只『然り、然り、否、否』<sup>(i)</sup>である。『是より過ぐるは惡より出づる』<sup>(i)</sup>ものである。彼に取つては、一物は存在するか、然らざれば存在しない。一物が同時に、一物であり又他物である事は出來ない。肯定と否定とは絶対に相反撥し、原因と結果とは同じく固定的に對立する。



(1) 新約聖書馬太傳第五章三十七節に、『爾曹なんぢらたゞ是しかり々いなく否々いなくといへ、これより過ぐるは惡より出づるなり。』とある。

チヨット見ると、此の考へ方は我々に取つて甚だ分明である。これが即ち謂ゆる健全な常識である。然るに此の健全な常識なる者が、自家の四壁内の平凡な領域に於いてこそは、至極尊敬すべき先生であるが、一たび學問研究の大海に乗り出すや否や、實に驚くべき冒險をやる事になる。故に形而上學の考へ方は、其の研究題目の性質に従ひ、相當の範圍までは是認すべきものがあり、又必要のものであるけれども、早晚その限界に到達して、それから以外に出る時には、忽ち偏見となり、短見となり、抽象となり、そして解くべからざる矛盾に陥つてしまふ。即ちそれは、個々の事物を考へて其の相互關係を忘れ、事物の存在を考へて其の成長と消滅を忘れ、其の靜止を考へて其の運動を忘れ、單に木ばかりを見て森を見ないからである。

### 三 辯證法の考へ方

日常の事柄としては、例へば、我々は一動物が生きて居るか否かを知り、又それを斷言する事が出来る。然しながら少し嚴密に研究して見ると、法律學者などの善く知つている様に、それが



極めて複雑な問題になる場合が多い。母の胎内に在る子を殺す場合に、どこから以上を殺人と云ふべきかに就いて、法律家は徒らに其の頭を悩ましたが、とうとう其の合理的限界を見出す事が出来なかつた。それと同じく、死の瞬間を絶対に定める事も亦た不可能である。生理學に依れば、死は瞬間的即時的の現象でなく、寧ろ頻る長引いた過程である。

されば總ての生物體は、時々刻々に於いて、同一物であり、又同一體でない。生物體は時々刻々に外部から供給される物質を同化し、そして他の物質を分離させている。時々刻々、其の體内の或る細胞は死に、他の細胞は新に生じている。従つて早晚、其の體内の物質は全く一新され、悉く他の物質分子に依つて補充される。故に各生物體は、常に同一物でもあり、又違つた物でもある。

更に嚴密に研究を進めると、對立物の兩端、一例へば積極消極の如きもの—は、對立すると同時に、又相離れる事の出来ないもので、其のあらゆる反撥にも係はず、亦た互ひに交錯して居るものである。それと同じく、原因結果といふ考へも、只だ個々の場合に適用した時にのみ正當となるので、其の個々の場合を宇宙全體との總關係に於いて考へる時になると、此の二者は忽ち入亂れとなつて、普遍的の相互作用といふ考へに變じ、原因と結果は間斷なく入れ代りを爲しつ



、今こゝに結果である者が、すぐ又そこに原因となり、更に又その逆を現する事になる。

總てこれらの思惟の過程と方式とは、形而上學の推理の埒内には、會て入りこんで居ないものである。之に反し辯證法は、事物と其の觀念的模寫とを、兩者の關聯、連鎖、運動、生成、及び消滅に於いて、本質的に理解するものであるから、前記の如き自然界の諸過程は、即ち皆な辯證法独自の運動方法を確證するものである。自然界は辯證法の證明である。そして近世科學は此の證明の爲に極めて豊富な、日々増加する所の材料を供給し、それに依つて、結局、自然は形而上學的でなく、辯證法的に働くものだと云ふ事を立證してくれたのである。即ち自然はとこしへに同一の循環運動を爲して居るものではなく、現實の歴史を作りあけて居るものである。此に於いて、我々は先づ何人よりも、ダーキンを推さなければならぬ<sup>(1)</sup>。彼は、現時の一切の生物體、即ち植物、動物、及び人類すらもが、幾百萬年間の進化過程の産物である事を證明して、形而上學の自然觀に致命的の打撃を與へた。然るに辯證法的の考へ方を學んだ自然科学者がまだ甚だ少ないので、此の新發見の結果と先入の思索法との矛盾を來し、それが爲に、今日の自然科学の理論的方面には、際限なき大混亂が起り、教師も生徒も、著者も讀者も、皆な一樣の絶望に陥つて居るのである。



(1) マルクスがエンゲルスに送つた一八六〇年十二月十九日付の手紙〔マルクス、エンゲルス往復書簡集第二卷四二六頁〕に。「イギリス流の粗野な説き方ではあるけれども、此の書——(即ちデアキン著、種の起原)——は我々の説に對する博物學的の基礎を持つものである。」

故に、全宇宙と、其の進化と、人間の進化と、及びそれらの進化の人心に於ける反映とに對する嚴密なる描寫は、只だ辯證的方法に依つて、成長と消滅と、進歩的變化と退歩的變化との普遍的相互作用に對し、不斷の考慮を拂ふ事に依つてのみ成就される。新ドイツ哲學は即ち此の精神を以て起つた者である。カントは先づその事業として、ニュートンの太陽系固定不變説および、かのニュートン説に有名な第一刺激から以後に於ける、太陽系永久存續説を破つて、それを一個の歴史的過程と爲し、廻轉する星雲塊の中から、太陽及び總ての遊星の發生する事を説いた。同時に彼は又、太陽系の起原が之である以上、其の將來の死滅はどうしても必然だといふ結論に達した。爾來半世紀を経て、この説はラプラーズに依つて數學的に立證され、更に半世紀を経て、種々なる濃度を有する、前記の如き灼熱の瓦斯塊が、空間に存在する事を、分光器が證明した。

この新ドイツ哲學はヘーゲル哲學に至つて其の頂點に達した。自然界、歴史界、精神界の全部が、このヘーゲル哲學に於いて、——こゝがヘーゲル哲學の大功績であるのだが、——初めて一個の



過程として、即ち絶えず運動するもの、變化するもの、變形するもの、發達するものとして考へられた。従つて此の運動と發達とに於ける、内的關係を論證しようとする企てが起つて來た。この見地からすると、人間歴史はもはや決して、今日成熟している哲理の裁斷に依つて悉く一樣に有罪を宣告される様な、そして人は出来るだけ早くそれを忘れてしまふが善いと云ふ様な、そんな無意味な暴動の荒れ狂ひではなく、實に人類その者の進化の過程と見るべきである。そこで思惟の任務はこの過程の段々の進行を、そのあらゆる迷路の間に追究し、外見上、偶然と見える一切の現象の中に、内的法則を立證するに在ることになつた。

ヘーゲル哲學が自己の提出した問題を解決しなかつたといふことは、今こゝでは、どうしても宜しい。ヘーゲル哲學の畫期的の大功績は、只その問題を提出した所にある。この問題は到底、單一の個人の解決し得る所でない。ヘーゲルはサン・シモンと共に、當時に於ける最も博學の人であつたけれども、それでも彼は猶、一つには、必然的に局限されて居る所の、彼自身の智識範圍に依つて制限され、二つには、彼れの時代の局限された智識と見解との、其の範圍と深度とに依つて、同じく制限されていた。之に加ふるに、更に又第三の制限があつた。ヘーゲルは唯心論者であつた。即ち彼に取つては、彼れの頭腦中の思想は、現實の事物および過程を大なり小なり抽



象した所の影像ではなく、却つて其の逆に、彼に取つては、事物とその發展とは、世界以前から既に何處かに存在している所の、理性（イデエ *idea*）の實體化された影像に過ぎないのである。この考へ方は一切の事物を顛倒させ、世界の眞實の關係を全く逆にしてしまつた。だからヘーゲルは、正しく且つ巧みに多くの事物關係を理解したには相違ないけれども、前記の理由の爲に、その細目に於いて、多くのツギハギ、コジツケ、コシラエ、要するにマチガイが生ぜざるを得なかつた。<sup>(1)</sup>ヘーゲル哲學は實に哲學として巨大な流産、——但し同種類の流産の最後——であつた。ヘーゲル哲學は實際、救ふことの出来ない內的の矛盾に悩んでいた。即ち一方には、それは、人間歴史を進化の過程と見る所の歴史觀を根本提案として居るので、その性質上、謂ゆる絶対眞理の發展に依つて智識の絶頂に到達する事は出来ない筈であるのに、然るに又一方には、ヘーゲル哲學は即ちこの絶対眞理の精髓を以て任じているのである。自然と歴史との認識の一切を包括した、永遠に搖ぎなき智識體系といふ事は、辯證的思惟の根本法則と矛盾している。辯證法は固より決して、全外界に對する認識の體系が、時代から時代に亘つて、長足の進歩を爲し得るといふ思想を排斥するものでなく、却つて反對に、それを容認するものである。

(1) マルクスは資本論第一卷の再版の序文に、次の如く書いている。「私の辯證的研究方法は、その根本



がヘーゲルのと違つてゐるばかりでなく、實にその正反對である。ヘーゲルに取つては、人間の思惟過程——彼はそれをイデアエ(理性)と呼んで一個の獨立した主觀體にまでも變化させて居るが——その思惟過程が現實界の造物主であり、現實界は單にその外面的現象に過ぎない。之に反し、私に取つては、觀念界とは、人間の頭腦の内で變形され反譯された物質界より外の何者でもない。……辯證法はヘーゲルに依つて神祕化されたとは云へ、それが爲め決して、ヘーゲルが、辯證法の一般的作用形態を包括的および意識的に説明した所の、最初の學者たる事を妨げるものではない。辯證法はヘーゲルに於いて逆立している。我々はその神祕の外殼の内に合理の核心を見出すべく、再びそれを逆様に引くり返さねばならぬ。』

#### 四 唯物史觀

かくて從來のドイツ唯心論の全然間違ひである事が知れると共に、必然的に再び唯物論が起つて來た。<sup>(1)</sup>然し注意すべき事には、それは決して形而上學的の、全然機械的の、十八世紀の唯物論に返つたのでは無かつた。舊派唯物論は、素朴な革命的態度を以て、單純に過去一切の歴史を排斥したが、近世唯物論は歴史の中に人類進化の過程を見て、その運動法則を發見することを自己の任務としている。十八世紀のフランス學者、及びヘーゲルさへもが、自然界を以て、窮屈な循



環運動を爲す所の、永久不變の全一體であると爲し、ニュートンが教へた如く天體は永劫であり、リンネが教へた如く生物種屬は不變であるといふ考へに支配されて居たが、近世唯物論は之に反し、近來進歩した自然科学の智識を取り入れ、自然界も矢張り時間の中に歴史を持つ事、諸天體が、自分の上に好都合の状態の下に生ずる所の、生物の諸種屬と同じく、生れては死ぬるものである事を知り、循環運動については、それが一般に許され得る限り、無限に大規模なものになる事を知つてゐる。右二つの場合とも、近世唯物論は根本から辯證法的であつて、もはや他の諸科學の上に君臨する所の、何等の哲學をも必要としない。各種の専門科學が、世界の事物と、事物に對する我々の認識との、全體的關連の間に於いて、それぞれの他位を明瞭にする事になれば、その全體的關連を取扱ふ所の特殊の科學は忽ち不用となる。従つて從來の總哲學の中、猶ほ獨立して殘存するものは、只だ思惟と其の法則の學問、即ち形式論理<sup>(2)</sup>と辯證法<sup>(1)</sup>のみとなる。その他は總て自然と歴史との實證科學に屬する。

(1) エンゲルスはこゝで『從來の』哲學、即ち形而上哲學を排斥してゐる。辯證法、従つて又、辯證的唯物論は、エンゲルスの考へに依れば、猶ほ哲學として殘存する。フィロソフイ(哲學)といふ言葉をドイツ語のウエルト、アンシヤウウング(世界觀)と反譯して見れば、それを唯物史觀の核心と呼び、又マル



クス哲學とも呼び得ることが當然となる。

(2) 廣義の論理學は、思惟の形式と内容との關係、即ち經驗成立の原理を論究する認識論をも含むが、狭義の論理學は、思惟の形式と法則とのみを研究する。それが即ち形式論理學である、

然るに自然觀に於ける此の變轉は、諸種の研究の結果、それぞれ確實な認識材料が提供された其の程度に従つて行はれたのであるが、歴史上に於いては、それよりもズツト早く、歴史觀に決定的變化を生ぜしめた所の、歴史的事實が起つていた。一八三一年には、労働者の最初の一揆がリヨンに起つた。一八三八―四二年には、最初の全國的労働運動、即ちイギリスのチャーチスト運動<sup>(1)</sup>が、その頂點に達した。ヨーロッパの先進諸國に於いては、一方には大産業の、一方には新たに獲得されたブルジョア政權の發達した程度に應じて、プロレタリアートとブルジョアジーとの間の階級闘争が、歴史の前面に現出した。資本と労働の利益が一致すると云ひ、自由競争の結果が全般的調和と全般的繁榮を來すと云ふ、ブルジョア經濟學の偽りが、段々と事實に依つて明白に證明された。總てこれらの事物はもはや無視するわけに行かなくなつた。従つて又その、甚だ不完全ながらも、學理的表現である所の、フランスおよびイギリスの社會主義も、同じく無視するわけに行かなくなつた。然るにまだ殘存している舊式の唯心史觀は、物質的利害の上に生



じている階級闘争についても、又一般の物質的利害といふ事についても、何等の知る所がなかつた。その考へ方としては、生産も、一切の經濟關係も、只だ偶然に、『文明史』の附隨的要素として現はれたのであつた。

(1) Chartist movement 政治改革の條項を列記して、それを『平民憲章』(People's charter)として政府に要求した所からチャーチスト(憲章黨)といふ名稱が生じていた。(附録二、一二二頁以下参照)

然るに右の新事實は、從來の全歴史を新研究に附する事を強制した。その結果、過去、一切の歴史は、原始時代を除いて、階級闘争の歴史である事が分つた。そしてその互ひに闘争する社會階級が、いつでも生産關係および交換關係——一言にすれば、その時代の經濟關係——の産物である事。従つていつでも、社會の經濟的構造が其の實體上の基礎であつて、我々は只その基礎に依つてのみ、歴史上の各時代に於ける、法律上および政治上の諸制度から、宗教上、哲學上、及びその他の諸思想に至るまでの、上部建築の全部に對する、究極の説明を爲し得る事が分つて來た。ヘーゲルは歴史觀から形而上學を取除いて、それを辯證法的にしたけれども、彼の歴史觀はまだ根本に於いて唯心的であつた。然るに今や唯心論はその最後の隠れ家なる歴史觀から追はれて、新たに唯物<sup>(4)</sup>的歴史觀(唯物史觀)が生れ、從來の如く、人の意識に依つて人の存在を説明す



るのでなく、人の存在に供つて人の意識を説明する方法が発見された。

(1) 「過去一切の歴史は……階級闘争の歴史である」は、「共産黨宣言」の言葉。

(2) 原語は *Überbau* (*superstructure*) で、地下の基礎的構造に對する、地上の建築を意味している。

(3) ここは、マルクス著「經濟學批判」の序文中の數節、——唯物史觀の要約的敘述として有名な、よくあちこちに引用されて居る部分——を參照すれば、意味が一層明らかになる。即ち左の如し。少し長いけれども重要な文書だから全文を掲載しておく。

「人間は、その生活の爲に社會的生産を行ふ時、一定の、必然的な、自分の意志から獨立した關係、即ち其の社會に於ける物質的生産力の、一定の發達階段に相應する所の、生産關係を結ぶ。この生産關係の總和が社會の經濟的構造を組成するもので、それが實體の基礎となつて、その上に法律のおよび政治的の上部構造が建設され、又その基礎に相應した一定の社會的意識形態が生ずる。この物質生活に於ける生産方法が、社會的、政治的、及び精神的の、一般生活過程を條件づける。人の意識が人の存在（生活）を決定するのでなく、却つて其の反對に、人の存在が人の意識を決定するのである。

「然るに社會の物質的生産力は、その發達の或る階段に於いて、自分が今までその内部で働いて來た所の、その現存の生産關係——或はそれを法律的に表示したに過ぎない所の所有關係（財産關係）——と矛盾する事になる。即ちその關係が生産力の發達形式たる事から一變して、その制御物となる。ここに於いて社會



革命の時代が始まる。經濟的基礎が變化すると共に、その巨大な上部構造の全部も亦、徐々にか急激にか變革される。

「これらの變革を考慮するについて、經濟的生產條件の上に来る所の、自然科學に確證する事の出来る物質的の變革と、人がこの矛盾撞着を意識して、その擊破に努める所から生ずる、法律的、政治的、宗教的、藝術的、哲學的、之を一言にすれば、思想的の諸形體とを、常に善く區別する事が必要である。我々が或る個人を批判する時、滅多に、その人の自分で考へている所に依らないのと同じ様に、右の如き變革時代を批判する時、滅多にその時代の意識に依る事は出来ない。我々は寧ろその意識を、物質生活の矛盾の中から、即ち社會的生產力と生產關係（生產方法）との間に現存する撞着の中から説明せねばならぬ。

「一の社會形體は、その内部に餘地を與へられて居る所の、總ての生產力が發展した後でなければ、決して滅亡するものでなく、又新しい一層高級の生產關係は、それに對する物質的生存條件が、舊社會その者の胎内に孕まれた後でなければ、決して發現するものではない。故に人間は常に解決し得べき問題のみを提起するものである。なぜと云ふに、少し精密に觀察すれば、凡そ問題なるものは、その解決の爲の物質的條件が、既に存在しているか、或は少なくとも、成長の過程にある場合にのみ、發生するものだといふ事が、直ぐわかるのである。

「我々は極く大づかみに、アッヤ諸國、古代諸國、封建時代、及び近世ブルジョア時代の生產方法を以て



經濟的社會形體の進行的階段と目する事が出来る。このブルジョアの生産關係は、社會的生產過程に於ける最後の軋轢形式であつて、その軋轢は個人的軋轢の意味でなく、個人の社會的生活條件から發生する軋轢である。然るにこのブルジョア社會の胎内に發達する生産力が、同時に、又この軋轢を解決すべき物質的條件を作りだす。故に、この社會形體と共に、人間社會の歴史前記が終りを告げる。

(3) エンゲルスは又、マルクスの死んだ時、その吊辭の中に、唯物史觀について、次の如く云つてゐる。「デアキンが有機的自然の發展法則を發見したのと同じく、マルクスは、人間歴史の發展法則を發見した。即ち從來、理想論(唯心論)の跋扈の爲に隠されていた單純な事實、——人間は政治、科學、宗教等の事を行ひ得る以前、何よりも先づ、食ひ、飲み、家に住み、衣服を着なければならぬといふ事。故に直接の物質的生活資料の生産が、従つて一民族又は一時代の、それぞれの經濟的發展段階が、土臺となつて、その土臺からして、それらの人間の政治組織、法律觀念、藝術、及び宗教思想までもが發展して來た事。従つて又、それらの事が、——從來全くアペコペであつたのとは違ひ、——矢張り右の土臺に依つて説明されねばならぬといふ事。(それをマルクスが發見した。)

(4) Die materialistische Geschichtsauffassung; Der historischen Materialismus. (The materialistic conception of history; historical materialism.)



## 五 剩餘價值説

この時から以後、社會主義はもはや某々の天才的頭腦の中から偶然に發見されたものでなく、歴史的に發生した二階級、プロレタリアートとブルジョアジーの闘争の必然的結果と認められた。故に社會主義の任務は、もはや出来るだけ完全な社會組織を拵へあける事ではなく、その二階級と、その對立とを必然的に發生させた所の、その歴史的經濟的の經過を研究して、そこに現出している經濟状態の間にその矛盾を解決する手段を發見する事である。然るに従來の社會主義は此の唯物觀と相容れなかつた。それは丁度、フランス唯物論の自然觀が辯證法および近世自然科學と相容れなかつたのと同じである。従來の社會主義も、現存の資本家的生産方法と其の結果とを批難したには相違ないが、それを説明する事が出来なかつたので、従つてそれを片づけてしまふ事が出来なかつた。彼等は單にそれを悪い者として批難するだけであつた。故に彼等は、資本制度と不可分なる、労働階級の搾取に對して、猛烈に憤怒すればするほど、その搾取が何から成り立ち、どうして發生したかを明瞭に説明する事が出来ないのであつた。所が、それを説明するには一面には資本家的生産方法の歴史的關係を示し、即ち一定の歴史的時期に於けるその必



然、従つて又、その滅亡の必然を示し、そして一面には、まだ隠蔽されて居た所の、その内的特質をあばく事が必要であつた。そしてそれを成し遂げたのが即ち『剰餘價值』の發見であつた。剰餘價值説の證明する所に依れば、不拂労働の領有が資本的生産方法、及びその下に行はれる所の労働者搾取の根本形態である。又資本家は、労働者の労働力を商品として、それが市場で有する全價值を以て買取るのだけれども、彼は猶ほ其の仕拂つたより以上の價值を労働者から搾取するのである。そして結局、この剰餘價值が、有産階級の手中に不斷増加する大資本を積みあける所の、その價值總額の出處である。資本家的生産の、及び資本の生産の道行は、共にこれで説明された。<sup>(1)</sup>

(1) 原語 Mehrwert (surplus value)。

(2) マルクス著『價值と、價格と、利潤』の中から、こゝに相當する部分を少しばかり抄録する。

『紡績工が毎日六時間の労働で三シリングの價值(即ち自分の賃金に相當する價值)を棉花に附加するとすれば、十二時間の労働では六シリングの價值を附加し、従つてそれだけ剰餘の綿糸を産出する。然るに彼は自分の労働力を資本家に賣つて居るのだから、彼が作りだした全價值(若しくは全産物)は資本家の手に屬する。だから資本家は三シリングを前拂しては六シリングの價值を得るのである。そして其の半分



は更に賃金として拂ひだされるが、残る半分は全くの「剰餘價值」となる。」

「商品の價值は、それに含まれた労働の總量に依つて決定される。けれども、その労働の總量の一部は、賃金の形で代償を支拂つた價值の中に實現され、他の一部分は何等の代償をも支拂はない價值の中に實現される。故に商品に含まれた労働の一部は支拂労働であり、他の一部分は不拂労働である。そこで商品を、それに費された労働總量の結晶物として價值どほりに賣れば、資本家は必然的に利潤を得る事になる。彼は代償を支拂つた物を賣るばかりでなく、少しも元の掛らない物をも賣るのである。」

「労働者の一日の労働の一部分だけが報酬を支拂はれ、他の部分は支拂はれて居ないのに、そして又その不拂労働、若しくは剰餘労働が、即ち資本家の取る剰餘價值（即ち利潤）の源であるのに、全體の労働が支拂労働であるかの様に見える。この虚偽の外観が、賃金労働を他の労働形態（奴隸や農奴）から區別する。賃金制度の基礎の上に於ては、不拂労働も支拂労働の様に見える。然るに奴隸制に在つては、その労働の支拂はれた部分すら不拂である様に見える。次に農奴が、例へば三日間、自分の農地で働き、次の三日間、領主の土地で無代労働をやるとせよ。その場合、労働の支拂はれる部分と支拂はれない部分とが、目に立つて區別される。然し實際から見ても、人が一週間の中で三日間、自分の爲に働き、残る三日間、領主の爲に只で働くのと、工場又は職場で、毎日六時間だけ自分の爲に働き、次の六時間だけ雇主の爲に働くのと、同じ事ではないか。只だ後の場合には、支拂労働と不拂労働とが不可分に交りあつて居り、取引



の性質が全く蔽ひ隠されて居るだけの事である。」

右の二大発見、即ち唯物史觀と、剩餘價值に依る資本家的生産の祕密の暴露とは、實に我々がマルクスに負ふ所である。社會主義は之に依つて一個の科學となつた。あとは只主として、その細目と諸關係とを完成するだけの事であつた。



## 第二章 科學的社會主義

### 一 唯物史觀の前提

唯物史觀は次の命題から出發する。即ち、生産、及びそれに次いで其の生産物の交換が、一切の社會制度の基礎である事。歴史上に現はれた所の各社會に於ける、生産物の分配、及びそれと共に、階級もしくば身分の社會的編成は、何が如何に生産され、そして如何にその生産物が交換されるかに依つて定まる事。この故に、あらゆる社會的變化および政治的革命的究竟原因は、人間の頭腦の中に求むべきでなく、即ち永劫の眞理および正義に對する人間の智見の増進に求むべきでなく、實に生産方法および交換方法の變化に求むべきである。即ち之をその當時の哲學に求むべきでなく、實に經濟に求むべきである。現存の社會制度が漸く不合理に見え、不正と見え、道理が不道理となり、善が悪となつたといふ考への起るのは、實に、只、生産方法および交換形體が暗黙の間に變化を遂げた爲、以前の經濟條件に適合しなくなつた證據なのである。同時に又、この發見された弊害を除去する手段方法が、矢張り其の變化した新らしい生産關係その者



の中に、必ず多少とも發達して存在せねばならぬ筈である。そしてその手段は、決して頭の中から發明さるべきものではなく、只だ頭に依つて、生産といふ現存の物質的事實の中に發見さるべきである。<sup>(1)</sup>

(1) マルクス著『經濟學批判』の(前記の)序文中の他の一節を、左に再録する。「一の社會形態は、その内部に餘地を與へられて居る所の、總ての生産力が發展した後でなければ、決して滅亡するものでなく、又新らしい一層高級の生産關係は、それに對する物質的生存條件が、舊社會その者の胎内に孕まれた後でなければ、決して發現するものではない。故に人間は常に解決し得べき問題のみを提供するものである。なぜと云ふに、少し精密に觀察すれば、凡そ問題なる者は、その解決の爲の物質的條件が、既に存して居るか、或は少なくとも成長の過程にある場合にのみ、發生するものだといふ事が、直ぐわかるのである。」

然らば近世社會主義は之と如何なる關係を持つか。

## 二 近世社會主義

現存の社會制度は、近來やゝ一般に認められている通り、今日の支配階級たるブルジョアジー



に依つて作られたものである。ブルジョアジーに特有なる、——マルクス以後、資本家的生産方法と呼ばれている所の——生産方法は、封建制度の地方的および身分的特權と適合せず、又その個人相互間の束縛とも適合しなかつた。<sup>(1)</sup>そこでブルジョアジーは封建制度を叩きこわして、その壞れ跡の上に、ブルジョアの社會制度、——即ち自由競争、自由移轉、商品所有者の權利平等、その他あらゆるブルジョア的光榮の王國——を建設した。それから以後、資本家的生産方法は自由に發展する事が出來た。ブルジョアジーの指導の下に作り出だされた生産關係は、蒸汽と新機械とが舊式の手工的製造業を大工業に變化させてから以後、前代未聞の速度と程度とを以て發達した。然るに其の以前、手工的製造業と、<sup>(2)</sup>その影響の下に大いに發達した(純粹の)手工業とが、<sup>(3)</sup>同業組合の封建的束縛と矛盾するに至つたと同じ様に、今や大工業がほと充分な發育を遂げるに及んで、資本家的生産方法が押しこめられて居る所の、その範圍と衝突する事になつた。新らしい生産力は既に、その利用法のブルジョアの形態を越えて成長したのである。そして此の生産力と生産方法との矛盾は、例へばかの、人間の原罪と神の正義との矛盾のように、人間の頭の中に發生するものではなく、全く客觀的の、我々の外にある、それを作りだした人々の意志行動からさへも獨立した、事實の中に存するものである。近世社會主義はこの事實的矛盾の思想的反映に



外ならぬものであり、而も先づ、直接にその矛盾の下に苦しむ所の階級——労働階級——の頭の中に生じた所の、精神的反映である。

(1) イギリス譯に依つた私の前譯では、こゝが次の如くなつてゐる。「資本家的生産法は封建制度と適合せず、封建制度が個人に與へた特權と適合せず、又その全社會の階級別および地方團結と適合せず、更に又その社會組織の骨格を爲している所の世襲的主従關係と適合せぬ事になつた。」これに依ると、原文の意味が一層明瞭になる。

(2) 手工的製造業は、前にも註した通り、マヌファクツールであり、工場的手工業である。只の手工業はそれよりもつと舊式の、小仕掛のハンドウエルクである。故にその意味を明かにする爲、「純粹の」といふ言葉を括弧内に添えておいた。

(3) 同業組合はドイツ語のツンフト、イギリス語のギルド。第六二頁末行と、その註とを見よ。

然らば此の矛盾は何から成立つてゐるか。

### 三 社會的生產と資本家的領有

資本家的生産以前、即ち中世に於いては、労働者の生産機關私有を基礎とする所の小規模經營



が一般に行はれていた。即ち地方に於いては小農（自由民、或は農奴）の農業、都會に於いては手工業。労働<sup>(2)</sup>要具―土地、農具、職場、工具―は總て個々人の労働要具であつて、只一人の使用に適するものであるから、必然的に短小狹隘であつた。然し短小狹隘であるが爲に、それは普通生産者自身に屬していた。この散在した、狭小な生産機關を集中し擴大して、それを今日の強大な生産のテコに變ぜしめる事こそ、即ち實に資本家的生産方法と、その支持者たるブルジョアジ―の、歴史的任務であつた。十五世紀以後、單純な協力作業、手工的製造業、大工業の三段階を以て、如何にこの役割が歴史的に遂行されたかは、マルクスが資本論の第四章に詳説している。然るにブルジョアジ―は（同じく資本論に説いてある通り）この狭小な生産機關を強大な生産力に變ずる爲には、是非とも個人的の生産機關を、多人數の全體に依つてのみ使用される所の、社會的の生産機關に變ずる必要があつた。そこで糸挽車、手織機、金槌などの代りに、紡績機械、機械機、蒸汽槌が現はれ、個人的の職場の代りに、數百人、數千人の協力を要する大工場が現はれた。そして生産機關と共に、生産その者が矢張り個人的作業の一系列から社會的行爲の一系列に變じ、生産物も亦た個人的生産物から社會的生産物に變じた。綿糸、綿布、金屬品など、今ま工場から作りだされる物は、皆な多數の労働者の共同生産物であつて、それが出來上るまでには、順



々に皆の手を経て來なければならなかつたのである。従つて如何なる個人も、『これは俺が作つた』これは俺の生産物だ』と云ふ事は出來なくなつた。

(1) この『生産機關』の『機關』と、『労働要具』の『要具』とは、共に原語 Mittel (means) の譯語である。これを『手段』『資料』などと譯する場合もある。『手段』といふ譯語には、方法手段などといふ抽象的な言葉の感じがあつて、充分適切でないが、既に可なり廣く行はれても居るし、他に充分適切な言葉も見つからないので、後の方にはそれを使つた個所もある。同一の原語に對して、常に同一の譯語を使用するわけに行かない場合が、しばしばある。

然るに、社會の内部に於ける、自然生の(自然發生的の)、無計畫の、漸次に發生した分業が、生産の根本形態である處に於いては、その生産物が商品<sup>の</sup>の形を取り、その相互の交換、即ち賣買が、個々の生産者にそれぞれ種々の慾求を充足させる事になる。中世の有様は即ちそれであつた。例へば、農夫はその農産物を職人に賣り、その代りに職人からその手工品を買つた。この個人的生産者、商品生産者の社會に、今は、新らしい生産方法がはいりこんで來た。自然生的の、無計畫の分業が全社會に行はれている所に、計畫的分業が個々の工場内を組織だてた。個人的生産と相並んで社會的<sup>の</sup>生産が現はれた。兩方の生産物が同一の市場に賣りだされた。従つて其の



價格は少なくとも殆んど同一であつた。然るに計畫的の組織は自然生的の分業より有力であつた。社會的に勞働する工場は個別的の小生産者よりも、ヨリ安價にその商品を産出した。個人的生産は一部門から一部門へ續々として衰滅し、社會的生產が總ての舊生産方法を革命した。然し社會的生產の革命的特質は幾許も認識されないうで、只だ却つてそれが商品生産を獎勵し促進する手段として採用された。元來社會的生產は、當時すでに出來あがつていた所の、商品生産および商品交換の特殊の仕掛、即ち商業資本、手工業、賃金勞働と、密接の聯絡を持つて發生したのである。斯くて社會的生產は、自ら商品生産の一新形式として出現すると同時に、當然、商品生産の領有形式をも充分に保有していた。

中世紀に行はれたような商品生産に於いては、勞働の産物が誰の所有に屬すべきかについて、何らの疑問も起り得なかつた。即ち當時は通例、個々の生産者が、自分の所有する、多くは自分の作つた原料を用い、自分の勞働用具を以て、自分の手の、或は自分の家族の手の勞働で、商品を産出したのである。彼はその商品を改めて領有する必要がない。それは當然、初から全く彼に屬していた。生産物に對する所有權は、斯くて自己の勞働を基礎としていた。よし又、他の助力を借る場合があつても、それは通例、大した事でなく、大抵賃金以外、何かで埋合せをするので



あつた。同業組合の徒弟や下職人も、食費や賃金の爲に働くのでなく、一人前の職人としての自分の教育の爲に働くのであつた。

そこに大工場、大製造所に於ける、生産機關の集中、従つて實際上、社會的生產機關への變形が起つて來た。然るに、その社會的生產機關と生産物は、矢張り以前の通り、個人の生産機關および生産物として取扱はれた。從來、労働要具の持主は、その生産物が通例、自分の生産した物であつて、他人の助力を借るのは例外であつたから、それでその生産物を領有したのである。然るに今は、労働要具の持主が、その産物がもはや自分の生産した物でなく、全く他人の労働の産物であるのに、矢張り依然としてそれを領有する。そこで、今ではもう社會的に作りだされてゐる所の生産物が、實際に生産機關を動かし、そして實際にその生産物を作りだした所の人々の手に領有されないで、資本家に領有される事になつた。生産機關および生産は、既に本質上、社會的になつてゐる。然るにそれが、個人の私的生産を前提とする所の、従つて個人が銘々の生産物を所有して市場に運びだすといふ、その領有形式の下に置かれてゐる。生産方法はこの領有形式の前提を廢絶したけれども、猶その形式の下に置かれてゐるのである。<sup>(1)</sup>この矛盾が即ち新生産方法に資本的性質を附與するものであるが、現今に於ける有らゆる反目衝突の萌芽は、既に其中に



含まれている。そしてこの新生産方法が、總ての重要なる生産部門に對し、又總ての經濟的に重要な諸國に於いて、益々多く支配權を持ち、それと共に個人生産が驅逐されて、微力な殘存物となるに連れ、社會的生產と資本家的領有との不調和が、いよいよ明瞭に現はれざるを得なくなつた。

(1) 態と云ふまでもない事だが、この場合、領有の形式は元のまゝでも、領有の性質は、前記の諸變化に依つて、生産と同じ様に革命されている。自分の生産物を領有するのと、他人の生産物を領有するのとは、固より大いに相違した二種の領有法である。ついでに、資本家的生産方法の全部を既に萌芽として持つて居る所の賃金労働は、甚だ古いものである。それは偶發的、散在的の形に於いて、奴隸労働と相並んで、數百年の間存在していた。けれども、その萌芽は、必要なる歴史的豫備條件が備つた時、初めて資本家的生産方法に發達する事が出來たのである。——(原註)

#### 四 プロレタリアートとブルジョアジー

最初の資本家は、前記の通り、賃金労働の形式が既に存在して居るのを發見した。然しそれは例外として、副業として、補助として、一時的のものとしての賃金労働であつた。農村の労働者



が折々日傭稼をする事はあつても、彼等は自分の土地を幾モルゲンか持つていて、兎にかくそれでカツ／＼の生活だけは出来るのであつた。又同業組合の制度としては、今日の下職人は明日の本職人になり得べき仕組であつた。然るに生産機關が社會化されて、資本家の手に集中されるや否や、右の事情が一變した。個人的小生産者の生産機關および生産物は、次第々々に無價値となつた。彼等は資本家の下に賃金労働者となるより外はなかつた。昔は例外であり補充であつた賃金労働が、今は全生産界の通例となり基本形態となつた。昔は副業であつたものが、今は労働者の専一の活動となつた。一時的の賃金労働者が終身の賃金労働者になつた。又この終身賃金労働者の數が、右と同時に起つた封建制度の崩壊、諸侯伯の家來の解體、農民をその耕地から追出す事等に依つて、更に恐ろしく増加した。そこで一方には資本家の手に集中された生産機關、一方には自分の労働力の外、一物をも所有せざる生産者、その二つの間が全く分離してしまつた。社會的生產と資本家的領有との矛盾が、プロレタリアートとブルジョアジイの對立として現出した。

## 五 生産界の無政府狀態

前記の通り、資本家生産方法は、商品生産者、個人的生産者の社會にはいりこんで來た。そし



て其の社會では、生産物の交換が即ち社會的結合の媒介になつて居るのである。然るに商品生産を基礎とする總ての社會には、生産者がその社會内に於いて自分の社會的諸關係を支配する力を失つてゐるといふ、一つの特徴がある。即ち各人はその偶然所有する生産機關を以て、それ〴〵特殊の交換的慾望を充すべく、銘々に生産を行ふが、何人も、自分の製造する品種が何ほど市場に現はれるか、又それが一般に何ほど需要されているかを知らない。又何人も、その個々の生産物が實際の要求に應じて居るか否か、その生産費を償ふに足るか否か、兎にかく少しでも賣れるか否かをさへ知らない。社會化された生産界に無政府状態が漲つてゐるのである。然し商品生産には、他のあらゆる生産形態の場合と同じく、それと離るべからざる、一種特別の、固有的法則がある。そしてその法則が、その無政府状態にも係はらず、却つてそれの中に、それに依つて、行はれてゐる。即ちこの法則は、社會結合の唯一の永續形式である所の、商品交換の間に發現され、そして個々の生産者に對し、強制的の競争法則として、その力を振ふのである。生産者は初めこの法則を知らないで居るが、永い經驗の後、漸々にそれを發見する。故にこの法則は、生産者から獨立して、そして生産者と對立して、盲目的に作用する生産形態の自然法則として、實現するのである。即ち生産物が生産者を支配するのである。



中世紀の社會、殊にその初期の年代に在つては、生産はその本質上、自家用を目的としていた。即ち主として生産者および其の家族の要求のみを充すのであつた。個人的從屬關係の存在する農村の如きに在つては、それは又、領主の要求充足に貢献した。故にこの場合には、交換といふものが全く無く、従つて生産物は商品の性質を帯びなかつた。農家の人々は、自分達の要する殆んど總ての物、即ち食料品から家具衣服までを生産した。只だ自分達の要求以上、及び領主に差出す年貢以上の餘分を生産する事になつた時、初めて彼等は商品をも生産した。この餘分が社會的交換に附せられ、賣品として提供された時、それが即ち商品となつた。尤も、都市の手工業者は最初から交換の爲に生産せねばならなかつた。然しそれにしても、彼等は自分の要求の大部分を自分の手で充たしていた。彼等は菜園を持ち、又少しの耕地を持つていた。彼等は都市の共有林に自分の家畜を放つていた。彼等は又その共有林から材木と薪炭をも得た。婦人達は麻を紡ぎ、毛糸をよりなどした、交換を目的とする生産、即ち商品生産は、まだほんの初まりであつた。故に交換は小規模で、市場は狭小で、生産方法は變化なしで、そして外部には地方的の封鎖があり、内部には地方的の團結、即ち農村にはマルク<sup>(1)</sup>、都市にはツンフト<sup>(1)</sup>があつた。

(1) マルクはドイツその他に於ける土地共有村(或は村落共產體)の後身で、耕地は次第に個人の私



有となつても、山林原野は猶ほ共有として存し、一個の自治的團結を成していたもの。本譯書附録(二)の「マルク」(第一三七頁)は即ちそれに関するエンゲルスの研究論文である。ツンフトは同業組合。第一章第二節の註(2)を見よ。

然るに商品生産の擴大、殊に、資本家的生産方法の出現と共に、從來潜伏していた商品生産の法則が、ヨリ公然と、ヨリ有力に、作用しだした。諸種の舊束縛は緩み、封鎖的の舊制限は破れ、生産者は皆な段々に、個々獨立の商品生産者に變じた。社會的生産の無政府状態は明瞭となり、而もそれが段々激烈になつて來た。然るに資本家的生産方法がこの社會的生産の無政府状態を増大した所の、その主なる手段は、却つて無政府状態の正反對であつた。即ちそれは、各生産場に於いて、益々多くの生産を社會的に組織化する事であつた。舊事物の平和な安定状態は、之が爲に全く其の終りを告げた。何處でも、或種の産業部門に此の生産方法が輸入される以上、同産業は決して其の傍らに許容されない。何處でも、それが手工業を奪へば、必ずその舊手工業を亡ぼしてしまふ。労働界は全く戰場と化した。地理的の大發見、及びそれに伴ふ植民事業は、更に商品の販路を數倍して、手工業の製造業化<sup>(1)</sup>を促進した。この戦争は個々の地方的生産者<sup>(1)</sup>の間に起つたばかりでなく、地方的戦争が更に國家的戦争に成長した。十七八世紀の商業戦争は



即ちそれ。

(3)「手工業の製造業化」は、「純粹手工業の、手工的製造業への變化」を意味する。

最後に、大工業と世界市場の開拓とが、この戦争を世界的と爲し、それと同時に、前代未聞の猛烈さをそれに附與した。個々の資本家の間にせよ、産業と産業の間、國家と國家の間にせよ、自然的もしくは人工的生産條件の便宜が、それぞれの存在を決定する事になつた。一たび仆れる者は、用捨なく排斥される。それが即ちダアキン式の個體的生存競争を、自然界から人間社會に移して、更にそれを激甚化したものである。動物の自然状態が、人間發達の絶頂の如く見える。社會的生産と資本家的領有との矛盾が、今や個々の工場に於ける生産組織と、全社會に於ける生産の無政府状態との對立として、現はれて來たのである。

## 六 産業豫備軍

資本家的生産方法は、その起原の時から内在している矛盾對立の、右二つの現象形態に於いて運動している。従つてそれは、フリーエが既に發見していた所の、かの『惡循環』から脱出する事が出來ない。但しフリーエがその當時に於いてまだ認め得なかつたのは、その循環の環が次第



に縮小しつゝある事であつた。即ち彼は、その運動がむしろ螺旋状を爲し、遊星の運動の様に、遂にその中心と衝突して終滅に歸すべき事を認め得なかつたのである。所が、この社會的の生産無政府状態の有する強壓力が、即ち人間の大多數を驅つて段々にプロレタリアに變ぜしめるものであり、そしてそのプロレタリア大衆が、結局の所、又その無政府的生産を終結させるものである。又この社會的無政府生産の有する強壓力が、大工業に於ける諸機械の無限の完成を各工業資本家に對して強制命令と爲すものであり、そして各工業資本家は、その命令に従つて、自己の滅亡を免れるべく、段々にその機械を完成する事になるのである。

然るに機械の完成は即ち人間の労働を過剰にする。そもく機械の出現と増加が、少數の機械労働者に依つて幾百萬の手工労働者を驅逐する事を意味するのであるならば、機械の改良進歩は即ち更に、段々多くの機械労働者自身をも驅逐する事を意味する。そしてそれが結局、資本の雇入要求の平均數に超過する所の、待命賃金労働者の大群、即ち完全なる産業豫備軍を作りだすのである。この産業豫備軍(Reservearmy)といふ言葉は、私が既に一八四五年に命名して置いたものであるが、それは産業界の好景氣の時に徵發され、次いで必然的に生ずる恐慌の際には、忽ち街頭に投げだされるものである。即ちそれは、労働階級が資本と對抗する生存競争に於いて、常に



其の身に負はされている所の重荷であり、又労働者の賃金を、資本の要求に適合する低水準に引きさげる爲の調節機である。かくて機械が、マルクスの云つた通り、労働階級を壓伏する爲の、資本制度の最も有力な武器となり、労働要具が絶えず労働者の手から其の衣食を奪ひ、労働者自身が生産物が労働者を屈服させる道具になる。かくて又、労働要具の經濟的使用が、初から當然に、亂暴極まる勞力の浪費となり、労働機能の當然な必要條件に對する掠奪となる。かくて又、労働時間短縮の爲に最も有力の手段たる機械が、労働者と、その家族との有らゆる生活時間を變じて、資本の利殖的運用の爲に、勝手に使用され得る労働時間と爲す所の、最も確實の手段となる。かくて又、或者の労働過度が他の者の手を遊ばせる豫備條件となり、そして全世界に亘つて新らしい消費者を探し求めている大工業が、國內に於いては民衆の消費を最低の飢餓點にまで限定し、それが爲め自分の内國市場を破壊している。『最後に、この相對的過剩人口、即ち産業豫備軍を、常に資本蓄積の程度と力度とに平均させる所の法則は、(銀冶の神)ヘフェストスが(天火の盜人)プロメテウスを岩の上にクサビどめにしたよりも、一層堅く労働者を資本に縛りつけている、この法則は、資本の蓄積に相應する、貧困の蓄積を作るものである。だから一極に於ける富の蓄積は、同時に又、その對極に於ける、即ち自分の生産物を(他人の)資本として産出する階



級の側に於ける、貧困、苦惱、屈從、無智、兇暴、墮落の蓄積である。<sup>(2)</sup>かくて、この資本家的生産法の中から、生産物の他の分配方法を期待する事は、恰かも電池内の電極が、電池と連結してゐる時、その水を分解させず、その陽極が酸素を遊離させず、その陰極が水素を遊離させぬ様に期待するのと同じである。

(1) エンゲルス著『英國労働者階級の狀態』一〇九頁を見よ。

(2) マルクス資本論第一卷六七頁を見よ。(高島譯八五八頁に當る。)

前述の通り、近代的大機械の最高の進歩性は、社會に於ける生産の無政府狀態の爲に、個々の工業資本家に對し、絶えずその機械を改善させ、絶えずその生産力を増大さすべき強制命令となる。然るに生産の領域を擴大する事の、單なる實際上の可能性が、矢張り資本家に對して同様の強制命令となる。大工業の膨脹力は驚くべきもので、それに比べると、ガスの膨脹力など全く兒戯に等しいもので、今やそれは實に、あらゆる障礙を一笑に附し去る所の、質的および量的の膨脹慾として、我々の眼前に現はれている。所で、その障礙とは、大工業の生産物に對する消費であり、販路であり、市場であるのだが、然しその市場の擴大性は、外延的にも内包的にも、主として全く別の、遙かに力の弱い法則に依つて支配されている。市場の擴大は生産の擴大と歩調を



共にする事が出来ない。衝突は不可避である。そしてその衝突は、それが遂に資本家的生産方法その者を爆破しない限り、決して眞の解決に達し得ないものであるから、それが必ず週期的となる。資本家的生産法は新たに又一つの『悪循環』を作りだす。

## 七 恐 慌

實際の所、一八二五年に第一回の一般恐慌が起つてから以來、工業界および商業界の全體、即ち總ての文明諸國、及び多少ともまだ未開の從屬諸國に於ける生産と交換が、約十年に一回、滅茶々々になる。商業は停止し、市場は充溢し、生産物は堆積して全く賣れ行かず、硬貨は潜伏し、信用は消滅し、工場は閉鎖し、労働大衆は生活資料を餘り多く生産した爲に生活資料を失ひ、破産は破産に次ぎ、競賣は競賣に次ぐ。この不景氣は數年間繼續し、その間に生産力と生産物が大量的に濫費され破壊されて、結局、堆積された商品が大なり小なり、減價してハケロがつき、それで漸く生産と交換が再び動きはじめ。この歩みは漸々に速度を早めて小走りとなり、その産業的小走りが一轉して駈け足となり、その駈け足が更に又手綱なしの盲走りとなつて、工業上、商業上、信用上、及び投機上に於ける、完全なる障礙物競争を現出し、結局、幾回かの冒



險的大飛躍の後、再び元の恐慌の濠に落ちこむ。そして幾度もそれを繰返す。一八二五年以來、我々は既に五回の恐慌を経験し、現に又（一八七七年）その第六回を経験しつつある。この恐慌の性質は誠に明白で、フリーエが初めてそれを、多血症の恐慌——過剰から生じた恐慌——と呼んだ時、それが正に總ての恐慌に適中していた。

この恐慌の中に、かの社會的生産と資本家的領有との矛盾が大爆發となつて現はれる。商品の流通が暫くは全く停止され、流通手段たる貨幣が流通の妨礙となり、商品生産と商品流通との法則が總て顛倒し、經濟的衝突がその頂點に到達する。即ち生産方法が交換方法に對して叛逆するのである。

所でこの、工場内に於ける生産の社會的組織が、——それと並んで、そしてそれの上に成立して居る所の、——一般社會の無政府狀態に對して、もはやどうしても、折合のつかない所まで發展したといふ事實、——その事實が、——右の恐慌の間に於いて、多數の大資本家が仆れ、更に一層多數の小資本家が仆れ、それが爲に生ずる所の、資本の猛烈な集中に依つて、資本家にも善く分つて來た。資本家的生産方法の全機構（全裝置、總カラクリ）が、自分の作りだした生産力の壓力の下にへたばつてしまふ。それは（資本的生産方法は）もはや此の生産機關の大群を悉く資本に化するだ



けの力がない。彼等は（生産機關の大群は）只だ空しく横はつて居る。そして實に又それが爲に、産業豫備軍も亦た手を空しくして居なければならぬ。生産機關、生活資料、待命の労働者、あらゆる生産の要素と、一般財富の要素とが、豊饒過多に存在している。然るに『その豊饒過多が痛苦と缺乏の原因となる（フリーエ）。』何となれば、豊饒過多こそが即ち生産機關と生活資料を資本に化する事を妨げる者なのである。凡そ資本家社會に在つては、生産機關は、先づ資本に—即ち人間の労働力を搾取する道具に—化せられた後でなくては、決して其の職能を果し得るものではない。この生産機關と生活資料の資本化の必要が、それらの物品と労働者との間に怪物の如く現出するのである。只この怪物の爲に、生産に對する物的動力と人的動力との結合が妨げられるのである。只これが爲に、生産機關がその職能を果すことが出來ず、労働者が労働し生活することが出来ないのである。故にこれは、一方には、資本家的生産方法が、現在より以上に此の生産力を留置して行く能力の無い事を自認して居るのであり、又一方には、この生産力自身が更に其の力を増大しつゝ、矛盾の除去を迫り、自己の資本たる性質から解放を迫り、自己の社會的、生産力たる性質の實際的承認を迫つて居るのである。



## 八 資本の集中、生産力の國有

この猛烈に増大する生産力が、自己の資本性に對して反撥する事、即ち自己の社會的本性の承認をいよく盛んに要求する事、それが遂に段々と、資本家階級自身をして、——一般資本家制度の下に於いて可能である限り、——是非ともそれを社會的生産力として取扱はせる事になる。そこで、信用の無制限な膨脹を來す所の、産業の好景氣時代にも、又大資本の企業の崩壊から生ずる恐慌その者の場合にも、生産機關の大群が更に社會化の形式を取らせられる事になる。諸種の株式會社が即ちそれである。これら生産交換の諸機關の中には、例へば鐵道の如く、最初から資本家的搾取の他のあらゆる形式を排斥するほど、巨大なものも少なくなかつた。然るに或る發達階段に達すると、この形式も亦た不充分になる。そこで生産統制の目的を以て、一國內に於ける同一産業部門の諸大生産者が、トラストと稱する、生産の統制の目的とする、一團體に結合する事となる。彼等は先づ生産物の總額を定め、それを各自の間に割りつけ、そして豫め確定した賣價でそれを押しつける。但し斯かるトラストは、一朝不景氣の生じた場合、最も分裂しやすいものであるから、その爲に又、一層大なる集中的社會化が促進される。斯くて、遂に一産業の全體が



巨大なる一個の株式會社となり、國內的競争が變じて、その一會社による、國內的獨占となる。現に一八九〇年、イギリスのアルカリ産業に此の事が起り、四十八個の大工場が合同して一會社となり、六百萬ポンドの大資本を以て、統一的に經營されている。

このトラストに於いて、自由競争は獨占到變じ、資本家社會の無計畫生産は、來るべき社會主義社會の計畫的生産に降伏したのである。但しそれはまだ主として、資本家の利益の爲、便宜の爲であつた。然るに、こゝまで來ると、搾取の跡があまりに露骨で、もうどうしても破裂しなければならぬ。如何なる國民と雖も、このトラストに指導される生産、即ち僅かの一小群の利潤配當者の、社會全體に對するそれほど露骨な搾取を、我慢しては居られない筈である。

そこで結局、トラストの在ると否とに係はらず、資本社會の正式の代表たる國家が、生産の指導に當らないでは居られない事になる。<sup>(1)</sup>そして此の國有化の必要が、先づ郵便、電信、鐵道などの大交通機關の上に現はれる。

(1) こゝに「當らないでは居られない」と云ふ理由は、こうである。生産機關、或は交通機關が、實際、もはや株式會社の經營に適しないほど成長した時、従つて又、その國有化が經濟的に不可避となつた時、只その時にのみ、この國有化が、よしそれを實行する者が今日の國家であらうとも、經濟上の一進歩



を意味し、一切の生産力を社會自身の手握る爲の、新らしい第一歩の獲得を意味するのである。然るに近來、ビスマルクが國營事業に熱中しだしてから以後、一種の似せ社會主義が起つて、屢々阿諛追従の醜態に墮落しながら、無雜作に、如何なる國營事業も、ビスマルク流の者ですらも、社會主義的だと稱してゐる。所が、若し煙草の國營が社會主義的あるならば、ナポレオンもメテルニヒも、社會主義建設者の中に數へねばならぬ事になるではないか。又ベルギー國が日常平凡の、政治的および財政的の理由からして、主要の鐵道線路を自分で建設したとて、或は又ビスマルクが、何ら經濟的の必要もないのに、只だ戰爭の場合、便宜にそれを利用し得んが爲に、また鐵道従業員を政府の投票家畜として教育せんが爲に、別して又、議會の協賛を要しない新財源を作らんが爲に、プロシヤの主要鐵道線路を國有にしたとて、それは決して、直接にも間接にも、意識的にも無意識的にも、社會主義的政策ではない。若しそれが違ふと云ふなら、王室海事協會も王室陶器製造所も、陸軍裁縫隊すらも、皆な社會主義的制度だといふ事になる。更に甚だしきは、一九三〇年代、フリードリヒ・キルヘルム三世の下に於いて、或る狡猾者が大まじめで提案した、あの遊廓の國有すらも、亦然りである。——(原註)

若し、恐慌なる者が近代生産力のこれ以上の處理に對するブルジョアジーの無能を暴露するものであるならば、生産交通の大企業が株式會社となり、トラストとなり、國有となる事は、即ち



それらの目的に對するブルジョアジーの無用を證明するものである。資本家の社會的職能は、今や悉く給料取の使用人に依つて果されている。資本家は只だ配當を取り込む事と、利札を切り取る事と、株式相場を試みて相互の間に資本を奪ひ合ふ事との外、もはや何らの社會的活動を爲して居ない。資本家的生産方法は、初め労働者を驅逐したが、今は資本家を驅逐して、丸で労働者と同じように、過剩人口の列に下した。只だ労働者の場合と違ひ、まだ産業豫備軍としないだけの事である。

然るに株式會社にせよ、トラストにせよ、國有にせよ、その變化はまだ生産力の資本性を除去して居ない。株式會社とトラストとに於いては、固よりそれが明瞭である。そして近代××は又、ブルジョア社會が、労働者並びに個々の資本家の侵害に對して、一般資本家的生産法の外的諸條件を維持する爲に設けた所の組織に過ぎない。故に近代××は、その形體の如何に係はらず、本質上、資本家的機械であり、資本家の××であり、理想化された總資本家である。従つてそれが益々多く生産力を握れば握るほど、益々多く眞實の總資本家となり、益々多く人民を搾取する事になる。然るに労働者はいつまでも賃金労働者であり、プロレタリアである。資本關係はそれが爲に除去されず、むしろ却つて其の絶頂に押しやられる。所が、絶頂でそれがヒツクリかへる。



生産力の國有は矛盾の解決法ではないが、その解決法のハンドル（持手）、即ちその外形的手段を伏在させている。

## 九 勞働階級の政權掌握

そこで此の解決法は、近代生産力の社會的本性を實際上に承認する事に在り、従つて、生産、領有、及が交換の方法を、生産機關の社會的特質と合致させる事に在る。そしてそれは、社會が公然直接に、——社會以外の何者の管理にも適合しないほど成長して居る所の、——生産力を所有する事に依つてのみ實現される。さういふ事になれば、生産機關および生産物の社會的特質は、——今でこそそれが生産者自身に食つてかゝり、週期的に生産交換の方法を破壊し、單なる盲目的の自然法として、強制的、破壊的に作用して居るけれども、——それが今度は、充分の意識を以て生産者の手に利用せられ、從來の、混亂や週期的破壊の原因から一變して、生産その者の爲の、最も有力な槓杆（テコ）となる。

大なる社會力は全く自然力の如く作用するものである。我々がそれを認識せず、考慮に入れぬ間は、盲目的、強制的、破壊的であるが、我々が一たびそれを認識し、その作用、その方向、そ



の影響を理解する時には、それを段々と我々の意志に服従させ、それに依つて我々の目的を達する事が容易である。今日の強大なる生産力の如き、最も然りである。然るに我々が頑強に、この生産力の本性と特質を理解することを拒否する間は、——實際、資本家的生産方法とそれの擁護者とは、この理解に反抗して居るのだが、——その間は、此の力が我々の意に反して、我々に逆らつて作用し、その間は、前に詳述した通り、此の力が我々を支配するのである。

然し一たび其の性質が理解された以上、此の力は、協力せる生産者の手の中に於いて、悪魔の大王から従順な奴僕に變じてしまふ。それは即ち雷雨の稲妻に現はれる電氣の破壊力と、電信機のアーケ燈に於ける飼ひならしの電氣との差異であり、又火事の火と日用の火との差異である。斯くて、今日の生産力が、遂に漸く認識された所の其の本性に従つて處理される時、初めて生産界の無政府状態が無くなり、そして社會全體および各個人の慾求に従つて、一定計畫に基づく所の、生産の社會的經營が行はれる。そうすると、資本家的領有方法——即ち生産物が先づ生産者を壓伏し、次いで又領有者をも壓伏する領有方法——がすたれて、近代的生産機關その者の本性に基づく所の、生産物領有法が行はれる。即ち一方には、生産を維持し擴大する手段としての、直接の社會的領有、一方には生活と享樂の手段としての、直接の個人的領有。



資本家的生産方法は、段々に人民の大多數をプロレタリアに化すると同時に、そこにこの變革を完成する爲、—さもなければ自分が滅亡するので、—是非とも必要とされて居る所の、其の力を作りだしている。それは又段々に、既に社會化された大生産機關を驅つて、國有とすると同時に、そこにそれ自ら此の變革を完成すべき道を指ざし示している。即ち労働階級が國家權力を掌握して、生産機關を先づ國有財産に移す事となる。

然しながら労働階級は、それに依つて自らプロレタリアたる事を止め、又それに依つて一切の階級差別および階級對立を絶滅し、更に國家としての國家をも廢止する。從來の、階級對立に依つて運轉した社會は、國家を必要とした。即ち當時の搾取階級が其の生産の外的條件を維持する爲の組織、従つて又、被搾取階級を、それら現存の生産方法から生ずる所の壓伏條件（即ち奴隸制、農奴制、賃金労働制）に依つて、強制的に服従せしめる爲の組織を必要とした。この國家は社會全體の公けの代表であり、社會を明白な體制として結成したものであつたが、然しそれは、國家が、當時全社會を代表する所の、その階級の國家であつたといふだけの意味である。即ち古代に於いては奴隸所有者の國家、中世に在つては封建貴族の國家、現代に在つてはブルジョアジ—の國家。然るに、その國家が遂に全社會の本當の代表となる時には、それ自ら無用の長物とな



る。既に壓伏すべき社會階級が無くなつた以上、又既に階級支配が無くなり、從來の生産無政府状態に基づいた個人的の生存競争が無くなり、それから生ずる衝突も暴行も無くなつた以上、もはや鎮壓されるものが一つも無いのだから、特殊の鎮壓力、即ち國家の必要が無くなる。國家が眞に全社會の代表として出現する、その第一行爲、—即ち社會の名に於いて生産機關を占有する事、—それが同時に、國家としての最後の獨立行爲である。社會の諸關係に對する國家權力の干渉は各方面に對して段々と無用になり、遂におのづから消滅する。人に對する支配が、只だ事物の世話と、生産過程の處理とに變る。國家は『廢止』されるのでなく、死滅するのである。かの『自由國家』といふ言葉の如き、—宣傳的用語として假りにその許容される理由についても、或はその究極に於ける科學的不充分さについても、—總て右の意味に依つて判斷すべきである。かの謂ゆる無政府主義者の、今明日中に國家を廢止すべしといふ要求も、亦た同様である。

一切の生産機關を社會の手に占有するといふ事は、資本家的生産法が歴史上に出現してから以後、或る人々に依り、又は或る學派に依り、將來の理想として、多少とも漠然ながら、屢々夢想されたものである。けれども、その實現の實際的條件が具備した時、初めてそれが可能となり、歴史的必然となり得たのである。そしてそれが實現されるのは、他の總ての社會的進歩と同



じく、決して只、階級の存在が正義、平等、その他に反するといふ智見の爲でなく、又その階級を廢止するといふ單なる意志の爲でもなく、實に或る新らしい經濟的條件の爲である。社會が搾取階級と被搾取階級、支配階級と服從階級に別れたのは、前代に於ける生産の貧弱なる發達から生じた必然の結果であつた。社會の總労働が總人の生活に必須な衣食以外、極僅かの餘剩しか産出しない間は、従つて社會全員の大多數が、終日、若しくは殆んど終日、労働に従事せねばならぬ間は、その社會は必然的に數階級に區分される。即ち専ら勞役に服する大多數の人民の外、直接の生産労働から免除されて、社會の共同事務—労働の指揮、國家の事務、裁判、學問、藝術等—に従事する一階級が生じて來る。故に階級別の根柢を爲すものは即ち分業の法則である。けれども、何もそれが爲に、此の階級別が暴行、盜奪、詐欺、瞞着に依つて行はれて居るのに、妨げはない。又支配階級が一たび鞍の上に乗つた以上、いつでも必ず労働階級を犠牲にして自己の支配權を強固にし、その社會的指導を民衆搾取の増大に變じて居るのに、妨げはない。

然しながら、階級の區分が斯の如く歴史的に或る理由を持つとしても、それは只だ或る期間内に於いての事であり、或る社會條件の下に於いての事である。それは元來、生産の貧弱に基づいたものである。従つてそれは、近代生産力の充分なる發展と共に一掃されるであらう。そこで實



實際上、社會階級の廢止といふ事は、歴史進化の程度が、或る特殊の支配階級の存在（を必要とせぬ）ばかりでなく、何らの支配階級の存在をも必要とせぬ事になり、従つて階級別その者が既に時代錯誤となり、廢物となるに至つた事を前提とするものである。故にそれは又、或る特殊の社會階級が生産機關および生産物を領有し、従つてそれと共に政權を掌握し、文化を獨占し、智識的指導の地位に立つ事が、單に無用であるばかりでなく、經濟的、政治的、及び智識的に、進歩の妨礙であるといふ程度の、生産の發達を前提とするものである。

## 十 自由の國

斯くの如き時は今正に到來している。ブルジョアジーの政治的および智識的破産は、彼等自身に取つても、もはや殆んど秘密ではない。彼等の經濟的破産（恐慌）は既に十年目毎に規則正しく繰返されている。社會は、その恐慌の來る度毎に、自分で使用する事の出來ない生産力と生産物とに壓せられて窒息し、そして——生産者が消費すべき何物をも持たぬ、それは消費者が無いからだ——といふ、馬鹿けた矛盾に當面して、茫然と自失する。そこで生産機關の膨脹力が資本家的生産方法の束縛の綱を切り棄てる。この束縛から脱する事は、將來に於ける永續的な、不斷に急速



に前進する、生産の發達、従つて又、生産その者の、實際上無制限な増大に對する、唯一の前提條件である。まだそれだけではない。生産機關の社會的領有は、現在行はれている生産上の人爲的制限を除去するばかりでなく、又實に、現在に於いて生産の不可避的隨伴物であり、殊に恐慌の際、その頂點に達する所の、生産力および生産物の、積極的の浪費と破壊を防ぐ事となる。猶又、<sup>(1)</sup>その場合、今の支配階級および其の政治的代表者等の、馬鹿々々しい奢侈贅澤をやめさせる事に依つて、生産機關および生産物の多量を、社會全體の爲に残す事になる。此に於いて社會の全員が社會的生産に依つて生活を保證される事の可能性、——而もその生活が、物質的に充分豊富であり、更にその豊富が日々に増大するばかりでなく、猶ほ全員の肉體적および精神的能力に對し、その完全に自由なる發育と活動を保證する事の可能性——が、今や初めて生じている。現にこゝに生じているのである。<sup>(2)</sup>

(1) マルクスは資本論(第一卷、第二十四章、七)に於いて、次の有名な言葉を以て社會革命の豫想を叙している。「この資本の集中、即ち少數資本家に依る多數資本家の剝奪と相並んで、次の諸事が發達する。労働行程に於ける、絶えず其の規模を擴大しつつある所の協業的形式。技術上に於ける科學の意識的應用。組織的なる土地の利用。労働要具の、共同的にのみ使用さるべき労働要具への轉形。あらゆる生産